今昔物語

巻第26

特40
594

今昔物語集卷第廿六

本朝付宿報

於但馬國鷲鷗取若子語第一
行東方者娶蕪生子語第二
美濃國因幡河出水流人語第三
藤原明衡朝臣若時行女許語第四
陸奥國府官太夫介子語第五
繼母託惡靈人家將行繼娘語第六
美作國神依獵師謀止生贄語第七
飛驒國猿神止生贄語第八
加賀國諍蛇蜆島行人助蛇住島語第九

土佐國妹兄行住不知島語第十
參河國始犬頭糸語第十一
能登國鳳至孫得帶語第十二
兵衞佐上綾主於西八條見得銀語第十三
付陸奥守人見付金得富語第十四
能登國堀鐵者行佐渡國堀金語第十五
鎭西貞重從者於淀買得玉語第十六
利仁將軍若時從京敦賀將行五位語第十七
觀硯聖人在俗時値盜人語第十八
東下者宿人家値產語第十九
東小女與狗咋合互死語第廿
修行者行人家歇秡女主死語第廿一
名僧立寄人家被殺語第廿二
鎭西人打雙六擬殺敵被打殺下女語第廿三
山城國人射兄不當其箭存命語第廿四

於但馬國鷲甌取若子語第一

今昔但馬國七美郡川山の郷に住む者有けり其の家に一人の若子有て庭に腹這けるを其の時に鷲空を飛て渡ける間に此の若子の庭に腹這を見て飛落て若子を甌取て空に昇て遥に東を指て飛去にけり父母此れを見て泣悲むて追ひ取らむと爲るに遥に昇にけれい力不及して止にけり其後十餘年を經て此の鷲に被取にし若子の父用事有るに依て丹後國加佐の郡に行にけり其郷に有る人の家に宿ぬ其の家に幼き女子一人有り年十二三許也其女子大路に有る井に行て水を汲むと爲るに此の宿たる但馬國の者も足を洗はむが爲に其の井に行ぬ然る間其の郷の幼き女の童共數其の井に集り來て水を汲に此の宿たる家より來る女子の持たる鑵を其の郷女の童部奪ふ家の女子此れを惜て不被

奪と詐ふ程に鄕の女の童部共同心にして此の家の女子を罵て云く己れ驚の嗽ひ殘しそかしと云て詈り付つ家の女子被打て泣て家に歸る此の宿たる但馬の者も返ぬ家主女子を何の故ぞ泣と問へは女子泣のみ泣て其故を不答へ其の時に但馬の宿人見つる事なれい有つる樣を具に語て亦云く抑も此の女子をい何の故に驚の嗽ひ殘しとい云そと問へい家主答て云く其の年の其の月の其日の己巳鳩の樔ぞ者を落したりしに若子の泣音の聞しかは其の音を聞て樔に寄て見侍しに若子の有て泣しを取り下して其れを養ひ立て侍る女子なれい鄕女童部も其を聞き傳て此く詈立て申す也と云を此の但馬の宿人此を聞くに我こそ先年に子をい驚に被取てと思出て思ひ廻すに其の年其の月其の日と云を聞くに彼れ但馬國ぞして驚に被取し年月日につふと當たれ

は我か子にや有らむと思ひ出て云く然て其の子の祖と云ふ者や若しー聞ゆると問へい家主其の後更に然かも聞ゆる事不侍と答ふれは宿人の云く其の事ぞ侍り此く宣ふ時に思出侍る也とて驚に子を被取し事を語て此れい我か子にこそ侍なれと云に家主糸奇異くて女子を見合するぞ此の女子此宿人に形ち露違たる所无く似たりける家主然れは實也けりと信して哀かる事无限り宿人も可然て此に來にける事を云ひ次けて泣く事无限り家主も此く機緣深くして行き合へる事を悲むて惜む事无くして許してけり但し我も亦年來養ひ立つれい實の祖に不異然れい共ぞ祖として可養き也と契て其後い女子但馬にも通て共に祖にてなむ有ける實に此難有り奇異き事也かし驚の則ち嗽ひ失ふへきに生乍ら樔に落しけむ希有の事也此れも前生の宿報にこそい有け

め父子の宿世ゝ此くなむ有けると語り傳へたると也

東方行者娶蕪生子語第二

今昔京より東の方に下る者有けり何れの國郡とゝ不知て一の鄕を通ける程ゝ俄に嬈欲盛に發て女乃事の物に狂ふ如に思けれゝ心を難靜めくて思ひ繚ける程に大路邊ゝ有ける垣の内ゝ青菜と云者糸高く盛ゝ生滋たり十月許の事なれゝ蕪の根大きにして有けり此の男忽に馬より下て其の垣内に入て蕪の根の大なるを一ッ引て取て其を彫て其の穴を娶て嬈を成してけり然て即ち垣の内に投入て過ゝけり其後其の畠の主青菜を引取らむゝ爲ゝ下女共數具し亦幼れ女子共なと具して其の畠に行て青菜を引取る程に年十四五許なる女子の未た男には不觸りける有て其の青菜を引取る程に垣の廻を行て遊けるに彼の男の投入たる蕪を見付て此に穴を彫たる蕪の有そ此は何そなと云を暫く翫ける程に皺干たりけるを搔削て食てけり然て皆從者共具して家に返ぬ其後此の女子何にと无く惱ましー氣にて物なとも不食て心地不例有けれゝ父母何なる事そなと云ひ騷く程ゝ月來を經るに早う懷妊しけり父母糸奇異ふ思て何なる業をしたりけるそと責め問けれは女子の云ふ我更ゝ男の當りに寄る事无し只怪き事ゝ然の日然か有しー蕪を見付てなん食たり其の日より心地も違ひ此く成たるそと云けれとも父母不心得事なれゝ此れを何ある事とも不思て尋ね聞けれとも家の内の從者共も男の邊に寄る事も更に不見ぬ云けれゝ奇異くて日來を經る程に月既に滿て糸嚴し氣なる男子を平かゝ産つ其後云甲斐无き事なれゝ父母此を養る程に彼下し男國に年來有上けるに人數具ー

て返るとて其の畠の所を過けるに此の女子の父母亦有り様に十月許の事なれゝ此の畠の青菜引取らむと從者共具して畠に有ける程に此の男其垣邊を過くとて人と物語しけるに糸高やかに云ける樣哀れ一とせ國に下し時此を過し術无く開の欲くて難堪かりしかゝ此の垣の内より入て大きなりし蕪一ッを取て穴を彫て其れを娶てこそ本意を遂て垣内に投入てしかと云けるを此の母垣の内にして慥に聞て娘の云事を思ひ出て怪く思へけれゝ垣の内よりを出て何に何と問ふに男は蕪盗たりと云(テダ)を咎めて云なりとて戯言に侍りとて只逃に逃るを母極て事共の有れは必す承らむと思ふ事の侍る也我か君宜へと泣く許に云へは男樣有る事よや有るらむと思て隱り可申事にも不侍ら亦自らか爲にも重犯にも不侍そ只凡夫の身に侍れは然々の侍しそ我と物語の次に申つる也と云に母此を聞て涙を流して泣々男を引へて家に將行けは男心ゝ不得とも强に云へゝ家より行ぬ其時に女實にゝ然々の事の有れゝ其兒を其こに見合せと思ふ也と云て子を將出て見るに此の男に露違たる所无く似たり其時より男も哀に思て然ゝ此る宿世も有けり此ゝ何ゝ可侍きと云けれゝ女今ゝ只何ゝにも其の御心也と兒の母を呼出て見すれゝ下衆乍も糸淨氣也女の年廿許なる也兒も五六歳許にて糸嚴ゝ氣なる男子也男此を見て思ふ樣我れ京に返上て有んに指る父母類親も可憑さも无ゝ只此許宿世有る事也只此を妻にて此に留なむと深く思ひ取てやかて其の女を妻とゝて其なむ住ける此れ希有の事也然れゝ男女不娶と云へとも身の肉に嬈入ぬれゝ此なむ子を生けるとなむ語り傳へたると也(ヤム)

美濃國因幡河出水流人語第三

今昔美濃國に因幡河と云大なる河有り雨降て水出る時にも量り无く出る河也然れゝ其の河邊に住む人ゝ水出る時に登て居る所を作て家の天井を強く造て板敷の様に固めて置て水出れゝ其の上に登て物をも〻て食なを〻てそ有なる男ゝ船にも乘り游をも搔なとして行けとも幼き者女なとをは其の天井に置てそ有ける下衆ゝ其の天井をは□□とそ云ける而るに此て廿年に成ぬ其の因幡河量无く出たりける時其の天井の上に女二三人童部四五人を登せ置たりける家の水の宜き時にこそ柱の根も不浮て立てりけれ天井も過て遙に高く水上にけれゝ殘る家无皆流れて多人皆死にける中に女童部の登たる家の天井ゝ此の家共の中に強く搖たりけれゝ柱ゝ不浮て屋の棟と天井との限り壞れ不亂して水に浮て船の樣に流れて行けれゝ逃去て高き峯に登て見る者共ゝ彼の流れて行者共ゝ助ゝりやせむすらむ何か有んにらむと云ひ沙汰しける程に其天井に食物なとしける火を□にして風の強く吹て屋の上乃板に吹付にけれゝ水に流れてや死なむすらんと思ふ程に只燃に燃けれゝ音を擧て叫ひ合たりけれとも助けに行く人无くて見る程に燃畢にけれゝ人ゝ皆燒死にけり水に流れて行く間火に燒て死ぬる奇異く難有き事也と見繚ける程に其の中に十四五歳許なる童の火と離て水に踊入て流れて行け れゝ見る者彼の童の火難をゝ離ぬれとも遂に可生き樣无し彼の童人遂に水に溺て可死き報こそゝ有らめゝと云ける程に童流て行けるに水の面に草よりゝ短くて青き木の葉の有るを手に障けるまゝに引たをけれゝ其に被引て不流りけるに

此の引へたる木の葉の強く思けれゝ其に力を得て捜けれゝ木の枝也けりと思へけれゝ其の枝を強く引へて有る程に其の河ゝ出るかとすれゝ疾く水落る河にて漸く水の干なるまゝに此へ引へたる木の只出來に出來けれゝ枝の胯の出來たりけれゝ其の胯に直く居て水落畢なゝ此に助かるへきなむと思ける程日暮て夜ゝ成にけれゝつゝ暗にして物も不見へさりけれゝ其の夜ゝ明して水落してこそゝ木よりも下りめと思て夜の遅く明るをいつしかと待程に夜明て漸く日出らむ程に見下りしけれゝ目も不及雲居に爲たる心地のしけれは何なる事そと思ゝ吉く見下せゝ遥なる峰の上より深き谷に傾て生たる木の枝无くて十丈許ゝ上たらむと見ゆる木の細き小枝の有るを引へて居たる也けり少しも動かゝゆらゝとして枝折なゝ落て身も碎なむとすと思ふに可爲き方无かりけれゝ幼き心地ゝ觀音を念し奉て我を助け給へと音を舉て叫けれとも速ゝ聞付る人も无し水の難を免むと爲る程に此く遥なる木より落て身を碎て死なむと爲る悲き態かなと思ふ程に此の叫ふ音を人髣に聞付て此ゝ何なる音そと尋ける程に木の枝なる童を見付て彼に居たる童ゝ昨日水の上にて燒しか中に屋より漏て水に入し童にこそ有めれ彼れをゝ何ゝして助けむを爲ると云けれとも力及可き樣无し木の本を見れゝ枝も无く引へき所も无き十丈許登たる木なれゝ麻柱なと結て下にへき方も无き峰なれゝ思ひ繚ふ程に此れを聞繼つゝ人多く集て可爲き樣を云合とも云得たる事も无き程ゝ童の叫ふ樣今暫有ゝ心にも非すして落なむとゝ同死にを網を多く集めて其れを張て受けよ若

や助かると其れゝ上に落懸らむと云れゝ皆人然も有る事也と云て其邊に有ける網を數取り持來て重ねて強き繩を以て高く張て其れを便にて網を數重々て張たりけれゝ童觀音を念奉て足を離れて網の上に踊け れゝふり〳〵と落る程に遙也けり佛の御驗にや網の上に踊懸りて有ける人共寄て見けれゝ死入て不動りけるを和ら取り下して抑へたりけれゝ一時許有てそ生たりける實に難生き命存したる者になむ有ける方々然る難堪き目を見て命を生さる前生の宿報の強かりける事こそ有けむ此れを聞く人隣の國まて奇異に思ひけり此れを思ふに人の命ゝ何なれとも宿報に依る事にて有る也けりと人皆云けるとなむ語り傳へたると也

藤原明衡朝臣若時行女許語第四

今昔大學頭藤原明衡と云博士有き其の人若かりける時可然き所に宮仕しけり女房を語ひて忍て通けり其の局に入り臥さむか便无かりけれゝ其の傍に有ける下衆を語ひて其の家に女房を迎へ出て其こに臥さんと云けれゝ家主の男ゝ无くて妻の限り有けるか糸安き事と云て狹き小屋あれゝ己か臥す所より外に可臥き所も无かりけれゝ其の臥所を去て女房の局の疊を取りに遣て敷て其にやかて寢にけり而るに其の家の主の男ゝ我か妻の女他の男に竊に娶く也と聞けるに其の密男今夜なむ搆へて合ゝむと爲ると告る人有けれと搆て其を伺て殺むと思て妻には遠き所に行て今四五日は不來由を云ひ令知て虛行そして伺ふ所にてそ有ける其事をも不知て此明衡は來て打解て寢たる夜打深更ての程に此の家主の男窃に來て聞立けるに男女忍て物云

氣色有けれは然れはよ然り聞しに合せて實也けりと思て和ら搆へ入て伺ひ聞くに我が寢所に當て男女臥したる氣色思ひ暗けれは慥には不見男寢引の爲る方に和ら寄て刀を拔て逆手より取て腹の上と思しき所を搜得て突てむと思て肱を持上たる程に月影の屋の上の板間より漏たりけるに指貫の袂の長やかて物に懸たるに急と見付けれは見付て思様我が妻の女の許に此樣の指貫着たる人は密男とて不來者と若人違へたらむは極めて不便なるへし事かなと思ける程に極く娥き香の急と聞へけれは然はこそと思て手を引返へして着たりける衣を和ら搜けれは衣も與らかより障ける程より女房の急と驚て此に人の氣色の爲るは誰そとよと忍ひやかに云ける氣色のやはらかにて我が知女には非りけれは然はこそと思て居去ける程に明衡も驚き誰そと問ふ音を聞付て我が妻の女は下なる所より臥して思ける樣畫る我が夫の氣色の怪くて物へ行つるは若し其れが竊に來て入違へなと爲ぬるかなと思ける程に驚き騷て彼れは誰そ盜人かなと喚る音我が妻より有れは彼は我が妻には非て異人々の臥たりけるにこそ有けると思て立去て妻の臥したる所に行て妻の髮を引寄て竊に此と何なる事そと問へと妻然れはよと思て彼には上臈の今夜許とて借らせ給つれは借へ奉て我れも此に臥たる也希有の錯をすらんにと云ふ時にそ明衡驚て何事そと云けれは此の男其の入也けりと聞付て已は甲斐殿の雜色某丸と申す者候ふ殿の御けるを不知給して一家の君にこそ御ませ殆極き錯をなむ仕り候ひぬへかりしと然々の事に依て竊に伺ひ候つるに臥所に當て男女の氣はひの聞へ候つは然れはよと思給へて搆へ寄て刀を拔て

最中を捜得て肱を持ち上て候つる程に月影の漏入たるに希有に御指貫の袂を見付候て急と思給へつる樣已等が妻の許に密男とて此樣の指貫着たる人はよも不來者を人違へ仕たらむは極りるへき事かなと思給へるなむ肱を引て緩候つる極て御指貫の袂を見付て奇異き錯を仕り候はむにと云けれは明衡此を聞くに肝心緩て奇異く思ける其の甲斐殿と云は此の明衡の妹の男にて藤原公業と云人也けり此の男は其の人の雜色也けれは常に明衡の許に使に來けれは明暮れ見ゆる男也けり實に不思懸指貫の袂の德に希有の命をこそ存したりけれ然れは人は忍ふと云乍賤所なとは立寄まーき也けりとそ聞人も云ける但し其れも宿世の報也不死ーき報の有れはこそ賤の下臈なれとも然思ひ廻せ可死き報有ましかは思ひ廻す事も无く突殺しなまし然れは

諸の事皆宿報と可知しとなむ語り傳へたると

陸奥國府官大夫介子語第五

今昔陸奥の國に勢德有る者兄弟有けり兄ハ弟よりハ何事も事の外に增てそ有ける國の介にて政を收行ひけれは國の廳ちに常に有て家に居たる事ハ希にそ有ける家ハ館より百町許去てそ有ける字をは大夫の介となん云ける其かは若かりける時子も无りけれは我か財可傳人无とて子を强に願ひける程に年も漸く老にけり妻の年は四十に餘る程にてなん今ハ子産ん事も不思懸程に懷妊しにけり夫妻共に此を喜ひ思ふ程に月滿て端正美麗なる男子を産ハ父母此を悲み愛して目を不放養ふ程に其母程无く死けり歎き悲む事不愚といへ共甲斐无して止ぬ父此の兒の物の心知て長ひむまてハ繼母不見と云て妻を儲る事无

し只此介が弟も子も无りげるに合せて此甥の兒の極て嚴けれは我も此兒を子を憑まむと云けれゝ父の介も母も无て我獨り此を養ふに身の忿さにて常ゝ否不見程の不審に同心ゝ被思ゝ喜き事也と云て養ゝすれゝ弟迎へ取てを悲ひ養ひける而る間兒の年十一二に成ぬ長しく成まゝにゝ形の端正なるに合せて心ゝへさへ嚴くて人の爲に强にも无く教ふる文なをを悟り讀習ひけれゝ祖々の悲ひ愛いるは然る者まて被仕る從者共に至まて此兒を愛し傳けり而る間其國に可然者の男に送れて寡にて有女在けり此介が妻も无て有を聞て此兒の後見せんと勤に令云けれとも女の心ゝ奇異く怖しきに合せて身も急がしく る常ゝ家にも无れゝ妻の用も无ーとて不聞けれゝ女忽に妻に成らむと思ふにゝ我も女子ゝ一人持たれ共男子の无れと老の末乃憑みにも

其兒をせんと思ふ也とて押來にけり只此兒をのみ翫ひ悲ひけれゝ介怪とゝ思けれとも暫こそ不寄付けれ鰥なる男の許に寡なる女の來居て押て家の事共政て有けれゝ何ゝろゝせんとて近付ゝけり其後ゝ彌よ此兒を悲くして可有かしう見へけれゝ父介も此るゝてゝ今迄此を不寄ける事と思て萬を打預てけり十四五歳許の娘有けれゝ其をも此兒を此く悲くすれゝ我子の樣にを持傳ける此て此兒十三に成年繼母男の物を皆進退ー得て思ふ樣此男ゝ年既に七十に成て今日明日共不知此男子无ゝ若干多かる□□下の心かな此を失はむと思へ共忽に可爲樣なき程ゝ今出來たる郎等の愚遣り少氣にて人付なをぬへきを見得て取分て此を寵ひて物有れゝ取せなとーけれは郎等无限喜て生とも死とも只仰に隨ゝんと云けるを彌よ語ひ付て有程に此父の介沙汰有

觀瀾堂版

事有て御館に有て久く家に不返りける程に繼母此郎等を呼取て云く此に人數有れ共見たる樣有て汝を殊に哀れにすとゝ知たりや郎等の云く犬馬すら哀に爲る人にゝ尾不振樣やゝ候ふ何ゝ申ー候ゝむや人に取ても已ゝ喜き事をゝ喜ひ倆き事をゝ倆とこそゝ思ひ被取候に無限御顧の替にゝ生死も只仰に隨ゝんとこそゝ思へ給へ候へ其外の事ゝ候ふ共爭か背き申ー候ゝんと繼母此を聞て喜て云く我思つる本意有て思ける極て喜ー我露の隔无憑まむ然か可思しなと云て今夜吉日也とて此娘の乳母子なる者合つ郎等本妻ゝ有けれとも强緣を取と思て喜ふ事无限繼母此の男の心を取得て後ゝ妻を以て男に令云る樣今ゝ偏に憑めゝ我思ふ事を不云て可有に非すと男それこそは已か思ふ本意ゝては有めと答ふれゝ妻能夫の心を語ひ取て云く此我養姫君ゝ心ゝへも物を思知り參り哀ゝ御すれゝ幸の御さんするなめり實の父に送れ給て後心細く御せしを此介殿の母上を迎へ取給て後よりゝ可然契や御すらん亦无者に傳き給て生たる時ゝ男合せ奉らんと宣て既ゝ今日明日の事に成たるを此介殿の御財を引分る方无く我君に令傳たらゝ和主の世にてこそゝ有めと思ふを何か可爲と夫此を聞て疵咲て云く其ゝ難かるへき事の樣にも大事氣に宣ふ哉已か心也御前たに許させ給ゝゝ誰かしつる事共无て失てゝ若干の財共ゝ何かゝゝ行ゝんと爲と妻只此也御前も然思食たる也と云へゝ夫吉樣に申せといへゝ妻申さんとて朝疾參り寄て物云むと思たる氣色なれゝ主搆へ云せたる事ゝて急と心得て人も无方に呼取て何と无事なと云次てに此男賢に思ひ得たる樣ゝて云く只に候つる時もら御願の厚く候へゝ无限忝

く思ひ奉り候つるに彌よ此女人をさへ預給ひたれゝ何てか吉らん事
様の事ゝ思ひ寄て申さんとこそゝ思ひ候ふに此兒不御ゝ〜も姫君の
御爲にゝ吉く候なんかしと思給へ候ふを御許し候ゝゝ今日なとこそ
人不騒候ふに相構へんと思給ふるを何ゞ候と云ゝ繼母此まて後見思
ふらんとゝ思ひ不寄つ實に憑たりけりと云て上に着たる衣を脱て打
被て然らゝ此も彼もせよ何ゝせんすると云ゝ男此許思ひ遣て申す許
にてゝ何てかゝ愚なる事ゝ仕らん只任て御覽せよと云て立ぬ繼母喜
き物から心騒て居たるに此男立出て見れゝ折しも同様に遊ふ童部も
无て此兒小弓胡錄提て會たり男見付て突居たれゝ兒走り寄來て常に
具〜て遊ふ童を某丸や見えつると尋ぬれゝ男祖に具して遠く罷ぬと
こそ承りつれ何と此く徒然氣にて獨をゝ行せ給ふそと云へゝ此童部

を求るに獨も无れゝと云ゝ男の云く去來給へ伯父父の許ょ將奉らん
と兒何心も无打□て母堂に告奉らんと云へゝ男人に不令聞て密に御
ませと云々兒喜氣に思て走り行後手の髪のたり〜〜と〜て可咲氣な
るを見にかゝゆく難爲思へ共人に憑し氣をし見えんと思へゝ木石の
心を發して馬に鞍置て曳將來ぬ男の思ふ樣此兒に刀を突立箭を射立
て殺さむゝ尙かゝゆし只野に將行て堀埋んと思て弓を手箭に取て從
者をも不具して白き馬を曳て待立てる程ょ兒小胡錄負て走り出來た
り母堂ゝ疾く行けと有をとて馬に乘ぬ其伯父ゞ家ゝ五町許を去たり
けるに人にも不見〜て遥に四五十町許に將去て野ょ入ぬるを喜き事
に思て道ょも非ぬ方樣に遥ょ將行ゝ兒此ゝ何に例行道にゝ非る此く
ゝ將行をと云へ共此も同道に候ふとて二三十町許將入て暫く留り給

へ此に薯蕷の侍る堀て見せ奉らんと云ハ兒物心細氣に打思て何を薯蕷を堀る疾く行なんと云ふ顔の嚴く勞た氣なるを見に男もいてや何かせまし人の事を大事に思ふとて此も由无人かハ介殿何かゝ迷給むんをすらんと空怖くて木石の心を發して土を堀ゝ兒此は薯蕷を偏に堀そと思て何ら薯蕷々々と云ひ立るにそ此人の方人なれは悲さに不堪かしと思て涙の出を我乍も心弱しを念して目を塞て兒を引落せは兒愕て泣を男顔を外様に見向て衣を剝て穴ゝ押入は兒穴心疎の者の心や我をは殺てんとすと也けりと云程に只物不云せして土を只入に入て踏固て心の迷けるまゝに能も不堅して騒て歸ぬ然氣无く持成て有に繼母兒の頸に懸りて伯父かり行と云つる顔つき俤に思ひて我何ゝ狂ひて此る事を思寄つらん實の母も无者也つれは我も哀にせは能孝しつへかりつる者を此の女子より外ゝ我も男子も无若し聞なは中々に我道も絶此かゝ爲と思ふ女子の爲にも何かゝ有んすらむ此男は極て心幼氣に見ゆる者を少しも事違はゝ云や出さんすらんと取も返しつへく思けれ共殺て來にたれは可爲樣も无て无端く塗籠に居てを泣ける此て彼伯父此兒の俄に急と見まく欲くて戀しかをけれは從者共も皆行違て人も无りけるを呼に遣らん程を可待も无戀しく覺けれは只舍人男一人有けるを馬ゝ鞍置と云て胡錄搔負て急乘て走せて行程に道に草の中より兎の走り出たりけるを見て急き行つる心とも无く此兎を見に戀しかりつる事も忽に忘て箭を番て押懸て射むとより外の事不思野の中に走らせ入に草深く入にけれは數度射といへ共例は極て手利ゝて此樣の者ははつす事も无りけるゝ此兎を逃しめ希有の態

哉と思て箭をたにも取んとて押廻し〻々求ける程に狗かなどそれ思ゆる者の聲にてうめく音聞ゆ此は何方を若病人なとの有らと思て見れ共然る者无し怪ひ思て此音を聞は上には非て物に籠たる樣にて土の底に聞ゆる樣也而る間舍人男箭は求得て取つ然れとも此音は付て此く見顯さんと思て舍人男は此うめくは何の音そと問へは男も糸怪し と思て何の音はかは候らん何事そよと云て男も走り廻つ〻見程に只今土を掻埋たる穴と思しき所有舍人男此にこそ怪しき所候に此音の只此と聞え候ふ也といはは主寄て聞に實に然かは聞ゆ人の死人なとを埋たりけるらん活てうめくにや有んと思て何にあれ人の音なめり去來此堀出して見むといへは舍人男怖し氣と云を主此と不云を若人ならは人生むは極て功德そかしとて馬より下て此土を掻けるに只今迷ひ埋たりけれは糸和らかにて主も弓の本を以て掻き去く舍人男は手を以て掻去るに隨て此うめく音近く成る然はよとて急き堀るに能も不埋けれは穴の底も透たる樣にて此音此か底は聞成て堀るに大なる茶草榑の塞たるを搆て引上たるに付て此音高く成を見れは幼き兒を裸に剝て居へたり穴極し〻やとて引上て見は此我戀し〻と思て忿き行つる甥の兒にて有り某よと見に目も暗れ心も迷て此は何なる事そと思て掻寄たれは身も皆水旱て胸の許の少し煖なる先口に疾く水を入はやと思へとも遙なる野中なれは水もあ〻し舍人男に水求よと許云懸て我か裝束を迷ひ解て兒を懷に掻入て膚に宛て佛助け給へ此か命生給へと涙の不堪敢ぬを打巾つ〻兒の顏を見れは唇の色は无て眠り入たる樣なるを强く抱き佛を念し奉る驗にや唇の色少し出來にたりと

見程にそ舎人男帷を脱て水に□て息も絶々に走り來る其を取て口より絞り入れは暫は出る樣なしとも心より願を立る驗よりや絞り入る水の少し入樣より見ゆれは彌よ佛を念し奉に絞り入るに嘗つる樣也然れは咽少し潤ぬらんと思て掻寄て抱たれと膚も少し煖る心地す然れは生なんするよりやと思に喜き物から不堪敢心を靜て見れは目を細目に見開くれは喜ーとも愚也や帷の汁は穢く思ゆれ共何よりも水のあらさこそ尙々淡り入れは糸吉く呑入まゝに目より涙の出れは既に生返ぬる也けり思ふに中々物不覺彌願を立る氣にや生返にたり押居れは絶々として苦氣なれ共日も暮ぬへけれは搆へて馬に乘て伯父井尻に乘て漸く行けれは暗く成程にそ伯父か家に行着たりける人にも不見して忍たる方より和ら入て舎人男の口吉く固て我居たる傍なる壺屋に將入ぬ妻何事の有そとて追次て入來たるに此兒の有を見て此は何にそ不例は持成そと云へは否や云は愚也此の兒の有つる事然々也此より俄に思ひ立て出つる程よりそ委く語るに奇異くて然て兒に抑も何成つる事そと問は糸絶氣に見上て物も不云は今心例樣に成なは云てんとて暫く人にも不令知ーて妻夫して繚ふ暮ぬれと火燈ーて粥なそ食ふ程に成ぬれは心安く思ふに夜中打過る程にそ兒寢驚て此は何事そといへは物思ふにたるあめりと思て伯父此は我家也何にしたりつる事□□つる樣は然々といへは兒父はと問へは父は未た此事知不給國府にこそは御すらめと答ふれは兒告奉らはやと云へと今告奉む然ても何なりつる事そ爲つる人は思ゆや疾く可聞事にてこそ有れと云へは兒不知吉も不思えと某丸と云男の去來給へ伯父か許へと云つれは母堂

に告て其男ゝ具して來つるに道にて其男の薯蕷掘て穴を掘て我を引落つるまては覺ゆ其後の事は不覺と云へは其男の爲態にては心とはよも爲し人の教へたるにこそは有らめ此繼母の謀おらんと心得つ夜の明るも心もと无て何しか明まゝに□□□□□□妻に返々す云置て見に物食せて後從者共も呼集て兄の許へ行く行付て見れは家搔澄て人幾もなし介殿はと問へは國府にこそはと答ふ可申事有て參たる也見は其も國府にかと問へは繼母此を聞て奇異き事かな其見は昨日より不見は其に參たるなめりとこそ思つれ何なる事そ若し人の心迷はさんとて量り給かと云て只泣ゝ泣は此伯父穴懊の女の心やと思とも暫は人に不知と思て怪の事の樣や人を謀るとても可云事をこそ申せ久く不見は不審くて見んと思給へつる也と云に然は此は何なる事

そとて嘘合たり尋ね求よと云ふを聞て此埋たる男出來て人よりも勝れて泣求め騷く伯父先介殿ゝ疾く告奉れと云て人走するに文奉らんと云て此伯父此く書て遣る可申事有て參たるに此兒の失て不見は承れは奇異くなん疾々御せ可申事共候ふと使馬に乘て走せけれは程无く行着て息も絶々に若君不御と云けれは年は老たる者の此を聞まゝゝ立上けるかふたゝとしけれは殆しかりけれは上に此とも不云敢只目代の許に此る事の有れはと許云遣て來けるに道にても落めへかりけるを從者共集て抱て辛くしてそ來着たる也先何なる事そと問ゝ繼母向ひ合て臥丸ひて云く主は年老給にたれは久くも副不給我は今暫も立送るへけれは此兒をこそ此世の財とは□□何なる事にて失ひつるか有ん兒を敵と思て殺と思て殺す人やは可有只兒樣の嚴かり

つれは京に上る人なとの法師に取せんなと思て取て逃にけるよや穴悲しとも悲しやと云ひ次て音を擧て泣事无限り父の介は泣にも否不泣只喘をし入たらん樣にて居たり伯父は哀れ有物をとも思へとも有つる事共の思ひ被出て憾けれとも然氣无て云く今は甲斐なし可然にこそは候ふらめ去來させ給ふ己か家へ心も愛給へ（ナクサメ）を倡へは介此か故尋て此も彼も聞定て法師ょ成なん今まて世有て此る目を見る也とて音を擧て泣も理也然れ共此彼云て搆て將出して行に郎等共ある限り具したを其中に此兒埋みの男も有り此を態と將行んと思ふょ彼か心と來れは糸吉と思て然氣无にて目を付て行程に將着ぬ其まて（ニタ）も介臥し丸ひ泣く弟云ひ誘へて内に將入とて睦まーき郎等一人を呼放て此兒埋の男ょ然氣无て付つ然れは二三人許心を合て守て搦よと云んょ

隨て慥に搦めよと云置て介を内に將入て此兒の有壺屋ょ入て見すれは介兒を取隠して人を迷はさんと心得て只嗔に嗔て戯も可爲樣有てこそ忌々く此る事して人迷すといへは弟穴鍬給へ有つる樣は然々と泣々語れは介此を聞て云へき限も无て兒に問へは兒有のまゝに□介奇異く思て先此男有つるは逃やーぬらんと云へは弟人付て侍とて出搦さすれは此男は此は何にと云乍ら哀れ然は思つる事をと云てそ介は太刀を拔て男の頸を切らんと爲と弟引へて有つらん樣慥に問括（ケタ）めてこそ何にもせめとて將放て間に暫は不云けれとも責て問けれは落て有のまゝに事共云てけり繼母の心奇異しと思て人を遣て家を堅させつ隠すとすれ共皆人聞て從者共も年來は上とて傳つれ共所も不置云けれは繼母糸强顔く此は何なる事そ不思懸事哉兒の出來て我爲態

と云かゝ可咲やと云をは殺つる者なれはよも不有と思ふなるへ一介も此家に四五日居て兒吉疏ゝ令祈なとして家に返らんとて其女家ゝ有ては目もこそ見合れをて弟を所に遣て繼母を令追出て其乳母の女令搦なとして娘をも歩より追出一て其故の者共一人も无く掃はせて後にそ兒具して家には返たりけり其を聞及ふ者は此繼母をそ憾き人口無なる當にも不寄けれは母も娘も奇異氣にてそ迷ひ行ける彼兒埋の男をは頸取なむ妻をは口割かんとーけれとも此弟兒の爲に由无事也とて制して唯追せをけり此兒埋ける穴に男の迷て茶草榑を入けるに此兒の可生報に有けれは兒には寄も不付得して穴に塞かりて透間の有て息の通て生たりける也此も前世の報也其兒は長に成て元服一て祖伯父失にけれは其二人か財を併て傳へて此も大夫の介とて事外に勢德有者にてそ有ける其大夫の介と見たりける人の聞て語一也此を思ふゝ繼母か心極て愚也我子の如く思て養立たらましかは不迷して孝養もめまし然れは現世後生心柄徒に成たる者也とをなん語り傳へたると

繼母託惡靈人家將行繼娘語第六　文缺

美作國神依獵師謀止生贄語第七

今昔美作國ゝ中參高野と申神在まに其神の體は中參は猿高野は蛇ゝてそ在まーける毎年に一度其祭けるに生贄をそ備へける其生贄には國人の娘の未た不嫁をそ立ける此は昔より近ふ成まて不怠一て久く成にけり而る間其國に何人ならねとも年十六七許なる娘け形ち清氣なる持たゝ人有けり父母此を愛して身に替て悲く思けるに此娘の彼生贄に被差にけり此は今年の祭の日被差ぬれは其日より一年の間に

養ひ肥してそ次の年の祭には立けり此娘被差て後父母无限歎て悲ひけれ共可遁様无事なれは月日の過に隨て命の促まるを祖子の相見む事の殘り少く成行けは日を計へて互に泣悲むより外の事无し然る間東の方より事の縁有て其國に來れる人有けり此人犬山と云事をして數の犬を飼て山に入て猪鹿を犬に令噉殺て取事を業としける人也亦心ろ極て猛き者の物恐ち不爲にてそ有ける其人其國に暫く有ける間自然ら此事を聞てけり而るに可云事有て此生贄の祖の家に行て云入る程に延有に突居て蔀の迫より臨けれは此生贄の女糸清氣にて色も白く形も愛敬付て髪長くて田舍人の娘とも不見品々しくて寄臥たり物思たる氣色にて髪を振懸て泣臥たるを見て此東人哀に思糸惜く思ふ事无限既に祖に會ぬれは物語なと爲祖の云く唯一人侍る娘を然々の事に被差て歎き暮し思ひ明して月日乃過に隨て別れ畢なむする事の近つき侍を悲ひ侍る也此る國も侍けり前の世に何なる罪を造て此る所に生れて此く奇異き目を見侍らんと東の人此を聞て云く世に有人命に增物无亦人の財に爲物子に增る物无其に唯一人侍給へらむ娘を目の前にて膾すに造せて見給はんも糸心疎し唯死給ひね敵有物にこそ身も惜けれ亦其君は今は无人也同死を其君我に得させ給ひて行列れる徒死爲者は无やは有る佛神も命の爲にこそ怖しけれ子の爲に我其替に死侍なむ其は己に給ふとも苦しとも思給そと祖此を聞て然て其は何に給はむと爲そと問へは東の人只可爲様の有也此殿に有とて人に不宣して只精進すとて注連を引て量給へしと云へは祖の云く娘たに不死は我も亡むに不苦と云る此の東の人に忍て娘を合せ

東人此を妻とーて過る程に難去思ひけれは年來飼付たりける犬山の犬を二つ撰り勝りて汝よ我ゑ代れと云ひ聞せて懇に飼けるに山より密に猿を乍生捕へ持來て人も无所にて役や犬に教へ㆑噉せ習はす本より犬と猿とゑ中不吉者を然ゆ教へて習すれは猿たに見れは數懸て噉殺す此樣ゑ習はし立て我は刀を微妙く磨て持たり東の人妻に云く我は其御代に死待りなんとす死は然る事にて別れ申しなむするゆ悲き也と女不心得とも哀れに思ふ事无限既ゑ其日に成ぬれは宮司より始めて多の人來て此を迎ふ新き長櫃を持來て此ゑ入よと云て長櫃を寢屋に指入たれゑ男狩衣袴許を着て刀を身に引副て長櫃に入ぬ此犬二をは左右の喬に入れ臥せつ祖共女を入たる樣に思はせて取出たれゑ鉾榊鈴鏡を持る者雲の如くして前を道嗅て行ぬ妻は何なる事ゆ出來らむすらんと怖しきに男の我ゑ替ぬるを哀に思ふ祖後の亡ひも不苦同ーー无く成らんを此て止あむと思居たり生贄御社に將參て祝申て瑞籬の戸を開て此長櫃結たる緒を切て指入て去ぬ瑞籬の戸を閉て宮司等外に着並て居たり男長櫃を塵許艢開て見は長七八尺計ある猿横座に有り齒は白して顔と尻とは赤し次々の左右ゑ猿百許居並て面を赤く成て眉(無一本)ゑを上て叫ひ嗅しる前ゑ俎に大なる刀置たり酢鹽酒鹽なと皆居えたり人の鹿なとを下して食んする樣也暫許有て横座の大猿立て長櫃を開く他の猿共皆立て共に此を開る程に男俄に出て犬に噉を祇〳〵と云へは二ッの犬走り出て大なる猿を噉て打臥ッ男ハ凍の如なる刀を拔て一の猿を捕へて俎の上ゑ引臥て頭に刀を差宛て汝ゆ人を殺ーて肉村を食は此く爲るーや頸切て犬に飼てんと云へハ猿顔

を赤めて目をしは扣て齒を白く食出して涙を垂て手を摺とも耳よも不聞入して汝が多年來多の人の子を噉るか替に今日殺てん只今にこそ有めれ神ならは我を殺せと云て頭に刀を宛たれは此二の犬多の猿を噉殺しつ適に生ぬるは木に登り山に隱れて多の猿を呼ひ集めて山響く許呼はひ叫ひ合れとも更に益无して而間一人の宮司に神託て宣はく我れ今日より後永く此生贄を不得物の命を不殺さ亦此男我を此援しつとて其男を錯犯す事无が亦生贄の女より始て其父母類親をも不可援に只我を助けよと云へは宮司等皆社の内に入て男よ御神此く被仰免し被申よと乖しと云へは男不免して我は命不惜多の人の替に此を殺してん然して共に无成なんと云て不免を祝申し極誓言立つれは男吉々今よりは此る態なせそと云て免奉れは逃て山よ入ぬ男は家に返て其女と永く夫妻として有けり父母い智を喜ふ事无限亦其家に露恐るゝ事无りけり其も前生の果の報にこそは有けめ其後其生贄立る事无して國平が也けりとなむ語り傳へたると

飛驒國猿神止生贄語第八

今昔佛の道を行ひ行僧有けり何くとも无行ひ行ける程に飛驒國まて行にけを而る間山深く入て道に迷にけれは可出つ方も不思へけるに道と思しくて木の葉の散積たりけるうへを分行けるよ道の末も无て大なる瀧乃簾を懸たる樣よ高く廣くて落たる所に行着ぬ返らんとに共道も不覺行むとれは屏を立たる樣なる巖の岸の一二百丈許よて可攀登樣も无れい只佛助け給へを念して居たる程に後ろに人の足音しけれい見返て見に物荷たる男の笠着たる歩て來れは人來るよこ

を有けれと喜く思て道の行方問はむと思ふ程に此男僧を見て極く怪氣に思たり僧此の男に歩ひ向て何こより何て御する人そ此道は何こに出たるそと問へ共答ふる事も无て此瀧の方に歩ひ向て瀧の中に踊り入て失ぬれは僧此は人には非て鬼にこそ有けれと思て彌よ怖しく成ぬ我れ今れ何にも免れん事難し然れ此鬼に不被食前に彼か踊り入たる樣に此瀧に踊り入て身を投て死なん後に鬼咋とも非可苦かると思得歩ひ寄て佛後生を助け給へと念して彼か踊り入つる樣に瀧の中に踊り入たれ面に水を灑く樣にて瀧を通ぬ今れ水に溺れて死ぬらんと思ふに尚移し心の有れ立返て見れ瀧れ只一重にて早う簾を懸たる樣にて有也けり瀧より内に道の有けるまゝに行けれ山の下を通て細き道有其を通り畢ぬれ彼方に大きなる人郷有て人の家多く見ゆ然れ僧喜しと思て歩ひ行程に此有つる物荷たりつる男荷たる者をれ置て走り向て來る後に長き男の淺黄上下着たる不後と走り來て僧を引へつ僧此れ何にと云へれ此淺黄上下着たる男只我許へ去來給へと云て引將行に此方彼方より人共數來て各我許へ去來給へと云て引しろへれ僧此れ何爲る事にか有んと思ふ程に此く狠かれ〳〵くして不爲そとて郡殿に將參て其定めに隨てこそ得めと云て集り付て將行れ我にも非して行程に大なる家の有に將行ぬ其家より年老たる翁の事々し氣なる出て此れ何なる事そと云へれ此物荷つる男の云此れ已か日本の國より將詣來て此人に給ひたる也と此淺黄上下着たる者を指て云へれ此年老たる翁此も彼も可云に非す彼主の可得なゝりと云て取せつれれ異者共れ去ぬ然れ僧淺黄の男に被得て

其れか將行方に行僧此は皆鬼なめり我をは將行て噉ハんするよこそ
と思ふに悲くて涙落日本の國と云つるハ此ハ何なる所にて此く遠氣
よハ云ならんと怪ひ思ふ氣色を此淺黄の男見て僧に云く不心得な思
不給そ此は糸樂き世界也思ふ事も无て豐にて有せ奉む爲也と云程に
家より行着ぬ家を見れは有つる家よりハ少し小けれとも可有かしく造
て男女の眷屬多かり家の者共待喜て走り騷く事无限淺黄の男僧を疾
く上を給へとて板敷に呼上れは貧たる笈を云物を取て傍に置て簑笠
藁沓なと脱て上ぬれは糸吉く□たる所に居へき先物疾く參よと云へ
ハ食物持來たるを見れハ魚鳥を艶に調へたり僧其を見て不食して居
たれは此淺黄の男出來て何と此を不食そと僧幼くて法師に罷り成て
後未た此る物をなん食ねハ此く見居て侍る也と云へハ淺黄の男現に

其ハ然さも侍るらん然れとも今ハ此御ましぬれハ此物共不食てハ否
不有悲く思ひ侍る娘の一人侍るか未た嬪にて年も漸く積りて侍れハ
其に合せ奉てんする也今日よりハ其御髮をも生し給て御ませ然りと
て今ハ外へ可御方も有まし只申に隨て御せと云けれハ僧此く云んに
違て心を持成さハ被殺もこそ爲れ怖く思るに合せて遁れ可行方も无
れハ習ひ无事なれハ然申す許也今ハ只宣ハんにこそ隨めと云へハ家
主喜て我食をも取出て二人指向て食てけり僧佛何に思食らんと思け
れとも魚鳥も能食畢つ其後夜に入て年廿許なる女の形有樣美麗なる
か能裝束きたるを家主押出して此奉る今日よりハ我思ふに不替哀れ
に可思也只一人侍る娘なれハ其志の程を押量り可給とて返入た社は
僧云甲斐无て近付ぬ此て夫妻として月日を過すに樂き事物に不似衣

い思に隨て着す食物い无物無く食すれい有ーまも不似引替たる様に太ぇたり髪も髻に被取る許に生ぬれい引結上て烏帽子したる形ち糸清氣也娘も此夫を極く難去思たり夫も女の志ーの哀なるに合せて我も勞く思ひけれい夜晝起臥ー明し暮に程に墓无て八月許にも□□而る間其程より此妻氣色替て極しく物思たる姿也家主い前々よりも勞く増て男い宍付き肥たるこそ吉し太り給へと云て日に何度とも无物を食すれい食肥るまに隨て此妻いさめ〳〵と泣時も有夫此を怪ひ思て妻に何事を思ひ給ふぇ心得ぬ事也と云へとも妻只物の心細く思ゆる也と云て其に付ても泣増れは夫心も不得怪しけれとも人に可問事ならねい然て過る程に客人來て家主に會たり互に物語爲を和ら立聞けい客人の云く賢く思ひ懸ぬ人を得給て娘の平かに御さんすること何に喜く思ひらんなと云へい家主其事に侍り此人と得まーかい近來何ある心侍らまし只今まていい求得たる方侍ねい明年の近來何なる心せんすらんとて後々出て去ぬれい家主返り入まゝに物參らせつゝ吉く食よなと云て食物なと遣せたれい此を食に付ても妻の思ひ歎泣心不得客人の云つる事も何なる事にゝと怖しく思れい妻に揖問とも物云ゝゝやとい思たる氣色乍ら云事も无し而る間此鄕の人々事急く氣色にて家毎まに饗膳なと調へ喧る妻泣思たる樣日に副て増れい夫妻に泣み咲み極き事有とも我によも不隔給とこそ思つるまに此く隔けるこそ佃けれとて恨こ泣けれは妻も打泣る爭か不申ーとい思いんする然とも見聞えんする事の今幾も有まーけれは此く睦まーく成けん事の悔き也と云も不遣泣けい夫我可死事の侍るか其い人の遂に不免道なれ

ハ苦らるへき事にも非す只其より外の事ハ何事り有ん只宣へと責云
けれハ妻泣々云く此國にハ糸ゆゝしき事の有也此國に驗し給ふ神の
御するか人を生贄に食也其御し着たをし時我も得む〳〵と愁へ嘆し
ハ此粉にせんとて云し也年ゟ一人の人を廻り合つゝ生贄を出すゟ其
生贄を求め不得時にハ悲しと思ふ子あれとも其を生贄に出す也其不
御ましかハ此身こそハ出て神に被食ましと思へハ只我替て出なんと
思ふ也と云て泣ハ夫其をハ何に歎き給ふ糸安き事なゝり然て生贄を
ハ人造て神ゟハ備ふるかと問へハ妻然にハ非す生贄をハ裸に成て俎
の上に直く臥て瑞籬の内ゟ搔入て人ハ皆去ぬれハ神の造て食となん
聞瘦弊き生贄を出しつ紙ハ神の怒て作物も不吉人も病郷も不靜とて
此何度と无物を食せて食ひ太らせんと爲也といへハ夫月來勞つる事

共皆心得て然て此生贄を食らん神ハ何なる體にて御するそと問ハ妻
猿の形に御すとなん聞と答ふれは夫妻に語ふ樣我に金吉らん刀を求
て令得てんやと妻事にも非すと云て刀一ッを搆て取せてけり夫其刀
を得て返々す鋭て隱して持たりけり過ぬる方よりは勇々寵て物も吉
く食太りたりけれは家主も喜ひ此を聞繼者も鄕吉かるへきなめりと
云て喜ひけり此て前七日を兼て此家に注連を引つ此男ゟも精進潔齋
せさす家々にも注連を引愼み合たり此妻は今何日そと計へて泣入た
るを夫云曖つゝ事にも不思をそ妻少し曖ける此て其日に成ぬれは此
男に沐浴せさせ裝束直くさせて髮削らせて髻取せて鬚直く搔疏ひ傳
立る間ゟ使何度とも无來つゝ遲々しと責れは男は舅と共に馬に乘て
行ぬ妻は物も不云して引被て泣臥たり男行着て見れは山の中に大き

なる寶倉有瑞籬事々しく廣く垣籠たり其前に饗膳多く居へて人共員不知着並さり此男は中に座高くして食はす人皆物食酒呑なとして舞樂ひ畢て後此男を呼立て裸に成結を放せて努々不動して物云なと教へて含て俎の上に臥て俎の四の角に榊を立注連木綿を懸て集て搔前を追て瑞籬の内に搔居へて瑞籬の戸を引閉て人一人も无返ぬ此男は足を指延たる胯の中に此隱して持たる刀を然氣无て夾みて持たりけり而る間一の寶倉と云ふ寶倉の戸すゝろにさと鳴て開けは其にそ少し頭の毛太りてむくつけく思はる其後次々の寶倉の戸共次第に開渡しつ其時に大きさ人許の猿寶倉の喬の方より出來て一の寶倉に向てかゝめけは一の寶倉の簾を搔開て出る者有見れは此も同し猿の齒は銀と貫たる樣なる今少し大きさ器量き歩出たり此も早う猿也けりと見て心安く成ぬ此樣にしつゝ寶倉より次第に猿出居て着並て後彼初め寶倉の喬より出來たりつる猿一の寶倉の猿に向居たれは一の寶倉の猿かゝめき云に隨て此の猿生贄の方樣に歩ひ寄來て置たる魚箸刀を取て生贄に向て切んと爲程に此生贄の男胯に夾たる刀を取まゝに俄に起走て一の寶倉の猿に懸れは猿周て仰樣に倒たるに男やかて不起して押懸りて踏へて刀とは未た不指宛て己や神と云へは猿手を摺異猿共此を見て一ッも无逃去て木に走り登てかゝめき合たり其時に男傍に葛の有けるを引折て此猿を縛て柱に結付て刀を腹に指宛て云く己は猿にこそ有けれ神と云虚名乘をして年々人を噉はむ極ぬ事には非すや其二三の御子と云つる猿慥に召出せ不然は突殺てん神ならはよも刀も立しや腹に突立て試んと云て塵計棲る樣にするを猿叫て手

を摺に男然らは二三の御子と云の猿疾召出せと云は其に隨てかゝめけは二三の御子と云猿出來たり亦我を切んとしつる猿召せといへは亦かゝめけは其猿出來ぬ其猿を以て葛を折に遣て二三れ御子を縛て結付つ亦其猿をも縛て己我を切んとしつれ共此隨はゝ命をは不斷今日より後案内をも知ぬ人の爲に祟を成し不吉事をも至さは其時になんしや命は斷てんと爲と云て瑞籬の内より皆引出して木の本に結付つ然て人の食物共したる火殘て有けるを取て寶倉共に次第に付渡せは此社より郷の家村は遠く去たれは此く爲事共をも否不知ら有けるに社の方に火の高く燃上たりけるを見て郷の者共此は何なる事そと怪み騷けれとも本より此祭して後三日かの程は家の門をも閉籠て人一人も外に出る事无りけれはき迷騷ひ乍ら出て見人も無し此生贄を出しつ

る家主は我生贄の何なる事の有るかと靜心无怖しく思ひ居たる我生贄の妻は我男の刀乞取て隱して持たりつる怪かりつるに合せて此く火の出來たるは彼ゝ爲態ならんと思て怖しくも不審くも思ふ程に此生贄の男此猿四ッ縛る前に追立て裸なる者の髻放たるかゝ葛を帶にして刀を指て杖を突て郷に來て家々の門を臨つゝ見れは郷の家々の人此を見て彼生贄の御子達を縛て前に追立て來るは何なる事そ此は神にも增たりける人を生贄に出したりけるにこそ有けれ神をたに此す增て我等をは嗽やせんすらんと恐て迷ひけり而る間生贄舅の家に行て門を開よと叫けれ共音も不爲と只開よよも惡事不有不開は中々惡き事有なんと疾く開よと門を踏立れは舅出來て娘を呼出して此も極き神にも增たりける人にこそ有けれ若我子をは惡とや思ふらん和

君門を開て云誘へよといへは妻怖れ乍ら喜しく思て門を細目に開たれは押開るに妻立れは疾く入こ其裝束取て得させよと云へは妻即返入て狩衣袴烏帽子なと取出たれは猿共とは家戸の許ゝ強く結付て戸口にて裝束〳〵て弓胡錄の有けるを乞出て其を負て舅を呼出て云く此を神と云て年毎に人を食せける事糸奇異き事也此は猿丸と云て人の家にも繫て飼て被飼て人にのみ被捺て有者を案内も不知して此に年來生たる人を食せつらん事極て愚也已此に侍らん限は此に被捺る事有まゝ只己ゝ任せて見給へと云て猿乃耳を痛く摘は念〳〵居たる程系可咲此人には隨ひたりける者にこそ有けれと見に憑〳〵く成て云く己等は更に此る案内も不知侍けり今は君そこそは神と仰き奉て身を任せ奉らめ只仰のまゝと云て手を摺は去來給へ有し大領の許へと云て舅具して猿丸共を前に追立て行て門を叫くに其も不開を舅と有て此只開給へ可申事有不開給は中々惡き事有なんと云恐〳〵けれは大領出來て恐々門を開て此生贄を見て土に平み居たれは生贄猿共を家の内に引烈て目を嗔かして猿に向て云ふ己か年來神と云虚名乗を〳〵て年に一人の人を食み失ひける已更よと云る弓箭を番て射ぬれゝ猿叫て手を摺て迷ふ大領此を見て奇異しく怖〳〵氣に思て舅の許に寄て我等をもや殺し給はんすらん助け給へやいへと舅只御せ已か侍んには よも然る事不有といへゝ憑〳〵く思て居に生贄吉々已か命をゝ不斷此より後若此邊に見へる人の爲ゝ惡き事を至さは其時ゝ必す射殺〳〵てんとそをそと云て杖を以て廿度許つゝ次第に打渡て鄕の者共皆呼集て彼社に遣て殘たる屋共皆壞集めて火を付て燒失ひつ猿をは四乍磔

貧せて追放けり片蹇きつゝ山深く逃入て其後敢て不見けり此の生贄の男ゝ其後其鄕の長者とーて人を皆進退し仕ひて彼妻と棲てそ有ける此方にも時々密に通けれゝ語り傳たる成へし本ゝ其にゝ馬牛も狗も无りけれとも猿の人棲をる加爲とて狗の子やと仕ゝん新ゝとて馬の子やと將渡して有けれゝ皆子共産てそ有ける飛驒國の傍に此る所有とゝ聞けとも信濃國の人も美濃國の人も行事无かも也其人ゝ此方に密に通なれとも此方の人ゝ行事无かなり此を思ふに彼僧の其所に迷ひ行て生贄をも止我も住けゝ皆前世の報にこそゝ有らめとなん語を傳へたると

加賀國諍蛇蜈島行人助蛇住島語第九

今昔加賀の國□□郡に住ける下衆七人一黨として常に海に出て釣を

好て業とーて年來を經けるに此七人一船に乘て漕出にけり此者共釣しに出れとも皆弓箭兵杖をなむ具しありける遥の沖に漕出て此方の岸も不見程に思も不懸に俄に荒き風出來て澳の方へ吹持行けゝ我に非て流れ行けれゝ可爲方无て櫓を引上て風に任て只死なん事を泣悲ける程に行方の澳に離れたる大きなる島を見付て島こそ有けれ搆て此島ゝ寄て暫くも命を助からはやと思けるに人なをの態と引付けん樣に其島に寄ゝけれゝ先暫くの命ゝ助りたりと思て喜ひ乍ら迷ひ下て船を引居て島の體を見れゝ水なと流出て生物の木なとも有氣に見へけれゝ食へき物なんとも有と見と爲程ゝ年廿餘ゝ有んと見ゆる男の糸清氣なる歩み出たり此釣人共此を見て早ふ人の住島にこそ有けれを喜ーく思ふ程に此男近く寄來て云く其達をゝ我迎へ寄つ

るとゝ知たるかと釣人共然も不知侍釣しに罷出たりつるに思ひ不懸風に被放て詣來つる程に此島を見付て喜乍ら着て侍る也男の云く其放つ風をゝ我吹せつる也と云を聞に然ゝ此ゝ例の人にゝ非ぬ者也けりと思ふに男其達ゝ極しぬらん何を其物荷(持タ)來と出來つる方に向て高かにいへゝ人の足音數して來也と聞程に長櫃二を荷て持來たり酒の瓶なとも數有長櫃を開たるを見れは微妙の食物共也けり皆取出して令食れは釣人共終日に極しにけれと皆吉く取食てけり酒なとも能呑て殘たる物共をゝ明日の新にとて長櫃に本の樣に取入て傍に置つ荷たりつる者共ゝ歸り去ぬ其後主の男近寄來て云く其達を迎へつる故ゝ此より(無)も澳の方に亦島有其の島の主の我を殺て此島を領せんとて常に來て戰ふと我相搆て戰返して此年來は過す程明日來て我も人も死生を可決日なれゝ我を助けよと思て迎つる也と釣人共の云く其來ん人ゝ何許の軍を具して船何つ許に乘て來るそ身に不堪事に侍りとも此く參ぬれゝ命を棄てこそと仰に隨ひ侍らめと男此を聞て喜て云く來らんと爲る敵も人の體にゝ非す儲けんする我身も亦人の體にゝ非す今明日見てん先彼來て島に懸らん程に我ゝ此上より下來らんするを前々ゝ敵を此龍の前に不令上して此海際にして戰ひ返すを明日ゝ其達を强く憑まんすれゝ彼れを上に登せんする也彼ゝ上に登て力を得へけれゝ喜て登らんと爲るそ暫ゝ我に任せて見むに我難堪成ゝ其達に目を見合せんするを其時に箭の有ん限り可射也努々愚に不可爲明日の巳時許より儀立て午時許にそ戰ゝんとする吉く々物なと食て此巖の上に立ん此よりそ上らんと(無)爲ると吉々教へ置て奥樣に入ぬ

釣人共其嶽に木なと切て菴造て箭の尻なと能々鋭て弓の絃なと括て其夜ゝ火燒て物語なとして有程に夜も曉ぬれゝ物なと吉食て既ま已時に成ぬ而る間來んと云ゝ方を見遣たれゝ風打吹て海の面奇異く怖し氣也と見程に海の面□□ま成て光る樣に見ゆ其中より大きなる火二ッ出來たり何なる事にかと見程に出來合ゝんと云ゝ方を見上たれゝ其も山の氣色異く怖し氣ま成て草靡き木葉も騷き音高く喧合たる中より亦火二ッ出來たり澳の方より近く寄來るを見れゝ蜈の十丈許ある游來る上ゝ□□に光たり左右の喬ゝ赤く光たり上より見れゝ同長さ許なる蛇の臥長一抱許なる下向ふ舌嘗つりをして向ひ合たり彼も此も怖れ氣なる事无限貴ま云しゝ如ま蛇彼か可登程を置て頸を差上て立るを見て蜈喜て走上ぬ互に目を瞋らかゝて守て暫く有七人の釣人ゝ教ゝまゝに巖の上に登て箭を番つゝ蛇に眼を懸て立る程に蜈進て走寄て咋合ぬ互にひしゝと咋ふ程に共に血肉に成ぬ蜈ゝ手多かる者にて打つゝ咋ゝ常に上手也二時許咋ふ程蛇少し□たる氣付て釣人共の方に目を見遣せて疾射よと思たる氣色なれは七人の者共寄て蜈の頭より始て尾ま至まて箭の有ける限皆射る弭本まて不殘射立つ其後ゝ太刀を以て蜈の手を切け祇ゝ倒れ臥にけり而れは蛇引離て去ぬれゝ彌よ蜈を切殺てけり其時に蛇□て返入ぬ其後良久ふ有て有ゝ男片蹇て極く心地惡氣にて顔なとも缺て血打て出來たり亦食物共持來て食せなとして喜ふ事无限ゝ蜈を切放ちつゝ山の木共を伐懸て燒てけり其灰骨なとをゝ遠く棄てけり然て男釣人とゆに云く我其達の御德に此島を平かま領せむ事極て喜し此島にゝ田可作所多か

り畠无量生物の木員不知然れゝ事ゝ觸て便有島也其達此島に來て住めと思ふを何にかと釣人共糸喜き事にそ可候ゝ妻子をゝ何にか可仕と云けれゝ男其を迎へてこそゝ來らめと云けれゝ釣人共其をゝ何にして可罷渡と云けれゝ男彼方に渡んにゝ此方の風を吹せて送らん彼方より此方に來らんゝゝ加賀の國に御する熊田の宮と申す社ゝ我かは別れの御する也此方ゝ來らんと思はむ時ゝは其宮を祭り奉らゝ輙く此方に可來也と吉々く教へて道の程可食物なを船に入させて指出しけれゝ島より俄に風出來て時も不替走り渡にけり七人の者共皆本の家ゝ歸彼島へ行んと云者を皆倡具して密ゝ出立て船七艘を調て可作物種共悉く拈て先熊田の宮に詣て事の由申て船に乘て指出けれゝ亦俄に風出來て七艘乍ら島に渡り着にけり其後其七人の者共其島に居て田畠を作り居弘まりて員不知人多く成て今有也其島の名をは猫の島とそ云なる其島の人年に一度加賀の國に渡て熊田の宮の祭なるゝ渡來て祭て歸を去ぬれゝ其跡ゝそ例の祭してけりと見ゆなる其祭毎年の事として于今不絶也其島ゝ能登國□□郡に大宮と云所にてそ吉く見なる晴たる日見遣れゝ離たる所にて西高まて青み渡てそ見ゆなる去ぬる□□の比能登の國□□の常光と云梶取有けり風に被放て彼島に行たりけれゝ島の者共出來て近くゝ不寄せめゝらく岸に船繫せて食物なと遣せてそ七八日許有ける程に島の方より風出來たりけれゝ走り歸て能登の國に返ゝける其後梶取の語けるゝ鬚に見しかゝ其島ゝゝ人の家多く造り重て京の様に小路有るそ見えし人の行違ふ

事數有きとそ語をける島の有樣を不見とて近くハ不寄けるにや近來も遥に來る唐人ハ先其島に寄てそ食物を儲け鮑魚なと取てやかて其島より敦賀にハ出なる唐人にも此る島有とて人に語なとそ口固むなる此を思ふ1前生の機緣有てこそハ其七人の者共其島に行住其子孫于今其島に有らん極て樂き島にてそ有なりとなむ語り傳へたるとヤ

土佐國妹兄行住不知島語第十

今昔土佐國幡多郡1住ける下衆有けり己か住浦1ハ非て他の浦に田を作けるに己か住浦に種を蒔て苗代と云事をして可殖程に成ぬれハ其の苗を船に引入て殖人なと雇具して食物より始て馬齒辛鋤鎌鍬斧鐇なと云物に至まて家の具を船に取入て渡ける1十四五歳許有男子

其弟に十二三歳許なる女子と二人の子を船1守を目に置て父母ハ殖女雇乘んとて陸に登にけを白地と思て船をハ少し引居て綱をハ棄て置たりける1此二人の童部ハ船底1寄臥たりけるか二人乍ら寢入けり其間に鹽滿にけれハ船ハ浮たりけるを放つ風に少し吹被出たをける程に干滿に被引て遥に南の澳に出けり澳に出にけれハ彌よ風1被吹て帆上たる樣1て行其時に童部驚て見に懸たる方1も无澳に出にけれハ泣迷へとも可爲樣も无て只被吹て行けり父母ハ殖女も不雇得て船に乘むとて來て見に船もなし暫は風隱に差隱たるかと思て此に走り彼に走を呼へ共誰かハ答へんと爲る返々求め騷けとも跡形も无れハ云甲斐无て止1けり然て其船をハ遥に南の沖に有ける島に吹付けり童部とも恐々陸に下て船を繫て見れハ敢て人无し可返樣もあ

けれゝ二人泣居たれとも甲斐无て女子の云く今こ可爲樣なし然りとて命を可棄に非す此食物の有む限こそ少しつゝも食て命を助けめ此か失畢なん後は何にしてか命は可生然れは去來此苗の不乾前に殖んと男子只何にも汝ら云んに隨む現に可然事也とて水の有ける所の田に作つへきを求め出して鋤鍬なと皆有けれは苗の有る限り皆殖てけり然て斧鐇なと有けれは木伐て菴なと造て居たりける程に生物の木時に隨て多かりけれは其を取食つゝ明し暮す程に秋にも成にけり可然にや有けん作たる田糸能出來たりけれは多く苅置て妹兄過す程に漸く年來に成ぬれは然りとて可有事に非ねは妹兄夫婦に成ぬ然て年來を經程に男子女子數産次けて其れを亦夫妻と成しつ大なる島也けれは田多く作り弘けて其妹兄か産次けたりける孫の島に餘る許成てそ于今有なる土佐の國の南の沖に妹兄の島とて有とそ人語りし此を思ふに前生の宿世に依てこそは其島にも行住妹兄も夫妻とも成けめとなん語り傳へたるとゝ

參河國始犬頭糸語第十一

今昔參河國□□郡に一人郡司有けり妻と二人持て其に蠶養をせさせて糸多く儲ける而るに本の妻の蠶養何なる事の有けるにか蠶皆死て養得事无りけれは夫も冷かりて不寄付成にけり然れは從者共も主不行成にけれは皆不行成にけれは家も貧く成て人も无く成ぬ然れは妻只一人居たるに從者僅二人計なん有ける妻心細く悲き事无限其家に養ける蠶は皆死けれは養蠶絶て不養けるに蠶一ッ桑の葉に付て昨けると見付て此を取て養けるに此蠶只大きに成れは桑の葉を擇入て

見れと只昨失ふ此を見ると哀に思へけれは搔撫つゝ養ふに此を養立ても何かはせんと思へとも年來養付たる事の此三四年は絶て不養けるに此く不思ると養立たるか哀と思けれは撫養ふ程と其家に白き犬を飼けるか前に尾を打振て居りけるに其前にて此蠶を物の蓋に入て桑昨を見居程に此犬立走て寄來て此蠶を食つ奇異妬く思ゆれとも此蠶を一食らんに依犬を可打殺に非す然て犬蠶を食て呑入て向ひ居たれは蠶一ッをたに不養得も宿世也けりと思ふと哀と悲くて犬に向て泣居たる程に此犬鼻をひたると鼻の二つの穴より白き糸二筋一寸許よて指出たり此を見に怪くて其糸を取て引は二筋乍ら絡々と長く出來れは籠に卷付く其籠と多く卷取つれは亦異籠に卷に亦□□□□ぬれは亦異籠を取出て卷取る如此して二三百の籠に卷取に盡もせされは竹の棹渡して渡の絡懸尙其ると盡せされと桶共と卷く四五千兩許卷取て後糸の畢被絡出ぬれは犬倒て死す其時に妻此は佛神の犬に成て助け給ふ也けりと思て屋の後に有畠の桑の木乃生たる本と犬を埋ぬ然て此糸をは細して可遣方无して繰ふ程に夫の郡司物へ行とて其門の前を渡けれは家の極て□□氣にて人氣色も无れはに哀と思て此に有し人何にして有らんと糸惜く思けれは馬より下て家に入たるに人もなし只妻一人多の糸を繰居たり此を見に我家に蠶を養富て絡懸る蠶は黑し節有て弊し此糸は雪の如く白して光有て微妙き事无限此世に類ひなし郡司此を見て大に驚て此は何なる事そを問へは妻事の有樣を不隱語る郡司此を聞て思はく佛神の助け給ける人を吾愚に思ける事を悔やかて留て今の妻の許へも不行して接けを其犬埋し桑の木

に蠶彈無蜜を造て有然れは亦其を取て糸に引に微妙き事无限郡司此糸の出來ける事を國の司□□と云ふ人に語て出したりけれは國の司公に此由を申し上て其より後犬頭と云糸をは彼國より奉る也けり其郡司ゝ孫なむ傳へて今其糸奉る竈戸にては有なる此糸をは藏人所に被納て天皇の御服には被織也けり天皇の御服の新に出來たりとなん語り傳へたる亦今の妻の本の妻の蠶をは搆て殺たると語る人も有慥に知す此を思ふに前生の報に依てこそは夫妻の間も返合ひ糸も出來けんと語り傳へたると

能登國鳳至孫得帶語第十二

今昔能登國鳳至の郡に鳳至の孫とて其に住者有けり其か初と貧くして便无て有ける時に家に怪をしたりけれは陰陽師に其吉凶を問ふにとて云く病事可有重く可慎惡く犯せは命被奪なんとすと鳳至の孫此を聞て大きに恐て陰陽師の教に隨て其怪の所を去て物忌をせんと爲に憑しく行宿て物忌可爲所も无に合て中々家の内に有らは屋も倒れて被打壓むすらんとも不知只家を離れて海邊の濱に行て居たらん山際ならは山も崩れ懸りなむ木も倒て被打壓なんとすと思て既に物忌の日に成て鶏鳴けるまゝに親の仕ひける從者一人許を具して家を出て濱邊に行にけり其鳳至の郡は懸りたる所も不見え何ならん世界か有むとも不見及所也其海邊の濱に行て此彼行けるに苦かりけれは打臥なとしる日くらさんとしける程に午時許に北を見遣たれは海の面奇異く怖しく氣に成て沖の方より高さ百丈はかをはあらんと見ゆる浪立て來る鳳至の孫此を見て无限怖しと思て具した男に彼浪の高さを

見よ奇異き事哉此は何かせんと爲る此浪の來なは此鄕には高鹽上て
无成なんするは可遁と騒き周章て云へは男此と何ゝ被仰そや只今海
の面は尉斗の尻の樣にて浪も不隻に此く被仰は若物の詫かせ給はん
物忌の日由无出させ給ひてといへは主の我には何の詫かんと爲るそ
此許怖ゝ氣なる水の面浪の立たるを此く云ふは汝か浪に被漂倒ぬへ
くて否不見にやあらん此浪の見始めつる時は百丈許見えつるか近
く成まゝに浪の長こそ劣にたれ既に近く成にたり何かせんと爲る
とて起て逃んと爲を男引かへて糸物狂はしき態哉定て物詫せ給ひよ
けりと云て捕へたる時に主の云く我は不物詫汝ゝ目には實に此浪の
不見かと男更に然る事不候と云へは主然ては我此浪に被漂倒て可死
にて怪ゝけるそ必す可死報の有て所を去て忌とも云て此く濱邊よも

出居たるにこそ有けれ今は逃とも不逃得此て只死なん德には佛を念
し奉むと云て手と合て居ぬ然て云樣此樣の見始つる時は百丈計は有
らんと見ゆつるか近く成まゝに長の促りて五十丈許に成にたりと
て目を塞きつ暫く有て亦目を開て云ふ此浪近く成にけり亦怪き事こ
そ副たれ此浪の中に大きに燃る火の出來にたる哉希有の態哉と云を
聞て云く既に燃る火の不行着程は卅丈許に成たり浪の長も廿丈許に
成にたりと云て目を塞つ男此く云を聞わろ〳〵と泣居たり亦目を見
開て云く此浪四五丈ゝ内に來にけり浪の長こそ二三丈許に成にけれ
此ゝ來てたりと云て手を摺て目を塞たる程に濱際ゝ立浪打寄る樣に
さら〳〵と懸る音の鬚にするとは男も聞き付て怪と思ふ程に暫く
許有て目を見開て浪こそ失にけれ此は何ゝ〳〵つる事そと云て見廻に

に浪の寄つる濱際近く初は无りつる物の圓く黑き物の有を見付て彼濱に有も何そと云時にそ男も此を見付たる去來行て見んとて走り寄て見れは塗たる小桶の蓋覆なる有其を取て開て見れは通天の犀の角の艶す微妙き帶有此を見て希有の態哉と思て云く此を天道の給はんとて此怪は有ける也けり今は去來返なんとて其帶を取て家に返ぬ其彼俄に家豐に成て財に飽滿て奇異に德人にて鳳至の孫とて有ける程に其國の守にて善滋の爲政と云る人此帶有と聞て其見せよそ云て事に事を付て責ためんとして數の郎等眷屬を引將て鳳至の孫か家に行居て日に三度の食物を令備ける上下合て五六百人許有ける食物をは吉く嫌て食へと教へたりけれは露も愚なるをは返し棄て責けれは吉く堪たりける者にて云に隨て調へ備へけり然とも暫くそ居たらんと思ひける程に強に四五月も居たりけれは鳳至の孫侘て此帶を頸にかけて家を出て逃にけり國を去にけれは守も家の内の物を皆計へ取て館に返にけり其後鳳至の孫此彼に望けれとも此帶の氣にや有けん旅の空に定めたる所も无りけれそも糸无下にい非てそ有ける其爲政の守任畢て次にい源の行任と云人そ成たりける其任にも鳳至の孫不返來けり其次に藤原の實房と云人成たりけるに鳳至の孫此く流浪し行ける程に年も老けれは其守の許に行て古へ有し事共そ語て國に返り住んと云けれい守糸よき事也と云て物なと取せて哀憐し(ヒタ)けれは喜て其帶を守に渡したりけれい守喜ひ乍ら帶を京に持上て關白殿に奉てけり其帶多く帶の中に加へて被置たらん其より後い有樣を不知此る微妙き財なれは浪とも見え火とも見えける也けり其も前

世の福報に依てこそ其帯も得めとなん語り傳へたると

兵衛佐上綏主於西八條見得銀語第十三

今昔兵衛佐□□と云人有けり冠の上綏の長かりけれは世の人上綏の主となん付たりける其人西の八條と京極との畠中に賤の小家一ッ有り其前を行けるに俄に夕立のしけれは馬より下りて其小家に入ぬ見れハ嫗一人居たり馬をも引入て夕立を過さんとするに家の内に平なる石の碁枰の樣なる有其に尻を打懸て上綏の主居たるに石を以て此居たるを手□に扣き居たれは被打て窪みたる所を見るに銀にこそ有けれと見つれは剝たる所に土を塗り隱して女にとふやう此石ハなその石を嫗の云く何その石にか候ハん昔より些此て候ふ石也と上綏の主本より此て有けるかと問へは嫗の云く此所は昔の長者の家とな

ん承はる此屋所ハ倉共の跡に候ひける實に見れハ大なる礎の石共有然て其尻懸させ給へる石は其倉の跡を畠に作らんと思て畝を堀る間に土の下より被堀出て候ひし也其か此て宿の内に候へは搔去んと思ひ候へとも嫗ハ力も弱し可搔去樣も无れハ憾むうち此て置て候ふ石也と上綏の主此を聞て早ふ不知にこそ有けれ目有者を見付る我此の石取てんと思て嫗に云く此石ハ嫗共こそ由无物と思なれ共我家に持て行可仕要の有也と云へハ嫗只疾召てよと云に上綏の主其邊に知たる下人の許に車を借て搔入て出んと爲程に只に取んか罪得かまーかりけれハ着たる衣と脫て嫗に取らすれハ嫗も心も不得ーて騷き迷ふ然れは上綏の主此て年來有石と只に取んか惡けれハ衣をハ脫て取する也と云へハ嫗聊不思懸不用の石の替に此許極き財の御衣と給は

らんとゝ不思つ穴怖し々々と云て棹の有に懸て禮む然て上綏の主ゝ此石を車に搔入て遣らせて家に返て打缺々々賣るに漸く思しき物共皆出來ぬ米絹綾なと多く出來ぬ然て西の四條よりゝ北皇賀門よりゝ西に人も住ぬ浮のゆう〳〵と爲る一町餘許有其を直幾許も不爲と思て直只少に買つ主は不用の浮なれゝ畠にも否作まし家も不作ましけれゝ不用の所と思ふに直少はても買ふ人の有れゝ者かなと思て賣つ上綏の主此の浮を買取て後攝津の國に行ぬ船四五艘艤なと具して難波の邊に行て酒粥なとを多く儲け亦鰹を多儲て往還の人と多く招き寄て其酒粥を皆飲ー然て其替にゝ此葦苅て少し得させよと云けれは或は四五束或は十束或ゝ二三束苅て取らす如此三四日苅せけれゝ山の如く苅せ積其を船十餘艘に積て京へ上るに往還の下衆共に只に過んよりゝ此船の繩手引と云けれゝ酒をー多く儲たれゝ酒を呑つ綱手を引けゝ糸疾く賀茂河尻に引付つ其後ゝ車借て物を取せつゝ運ひ往還の下衆共に如此酒を呑せて其買得たる浮の所に皆運ひ持來ぬ然て其葦を其浮に敷て其上に其邊土を救て下衆共を多く雇て列置て其上に屋を造にけり其南の町ゝ大納言源の定と云ける人の家也それを其定の大納言上綏の主の手より買取て南北二町にゝ成たる也今の西の宮と云所此也彼嫗の家の銀の石を取て上綏の主其家をも造り儲け家も豐成たりける也此も前世の機緣有事にこそゝ有らめとなん語り傳へたると

付陸奥守人見付金得富語第十四

今昔陸奥の守□□□□□□□と云人有けり亦其時に□□と云者有

けり互に若かりける時に守心より外に頗る妬しと思ひ置たる事の有けるを不知して□□守に付たりけるを守艶す饗應しけれは喜と思て有けるに陸奥の國に有ける庶の別當を以て一顧に爲るに京にしては然樣の事共とも未た定めねとも自然ら出來ける馬の事共とい此人に沙汰せさせなとして庶の別當に可仕樣に持成けれは人皆此人こそ一の人也けれと思て下衆共も數付にけり然て守國へ具して下るに京出より始て此人より外に物云ひ不合けれは道の程從者多く被仕て鑭めくも理也然れは肩を並べる人无て下る程に既に國に下着ぬ其に古い白河の關を云所にて守の其の關を入に供の人を書立て次第に關を入て入れ畢て後に其木戸を閉ける然れい此守共の書立を目代に預けて守い入ぬれは此樣の事の沙汰も我にそ行いせんいらんと思けるに然も无て異人の沙汰にて關の者共並ひ立て何主の人入れ彼主の人入れと呼て主從者次第に入る先我を呼立んすらんと聞に四五人まて不呼上けれい我を尻奏に入んもるなめりと思て從者共引將て待立る程に皆人入畢て後我入んにらむと思ふに木戸を急と閉て棄て入ぬれは奇異く云甲斐无て返らんするにも霞に立て秋風吹際に成にたり管无くとも國に暫も可有にい被指出にたり然れい付たりつる從者共い此りける人に我等か付て此る目を見事とて罵り覆して皆棄去にけり難去き從者共そ四五人許殘て何にまれ御せむ所に送り着てこそい何ても罷らぬと云て己かとちつら〳〵と歎き居たり主此を見に可爲方覺へさりけれい底い白砂にて淺き小河の流たりけるに下立て鞭の崎を以て水の底の砂を此彼搔立りけれい鞭の崎に黃なる物け有けるを何そと思

て搔廻すに圓なる物にて鞭乃被廻けれゝ和ら砂を搔去て促れて見る
小瓶の口ゝ見成しつ瓶ゝこそ有け紙人の骨あとと入て埋みたりける
にかを氣六借く思へけれとも搆て鰐開て瓶の内を見に金を一瓶入て
埋けるを見付てけれゝ怪しと思ひる心も忽に晴て思ふ樣國ゝ下着て
道の程の樣に被用て任を通したりをも金此許儲けん事不可有と思て
從者の居たるゝ立塞て此瓶を和ら拔出て極て重きを念して懷に引入
て衣の袖を絶腹ゝ結付て後從者共の許に歩ひ寄て云く此守此しつと
て此にて骸を可曝に非す越後の守ゝ年來親く知進たる人也國に坐な
れゝ越後へこそ超なめと云へゝ今四五人殘たる從者共其れも何か待
らむすらんを云も有亦何條事か候ゝん然こそ超させ給ゝめと云も有
此彼云へとも只打ゝ打て行けゝ郎等共も澁々に送れつゝ行に其夜ゝ

近ゝ近く留ぬ此小瓶をゝ皮子の底に深く納置つ然て□はせて行程に
日來を經て越後の館に行着ぬ然々の人なむ參たると云せたれゝ守呼
入て出會て云く陸奥の國□□（一字欠）にるゝ不思懸何かて來つるそと□□其
事に候ふ受領ゝ京にして書立をして不將下と思ふ人をゝ書立除つれ
ゝ其を見て罷留るゝ常の事也其に此ゝ京よを始て道の程も萬の事を
被云合候つれゝ賢しと思ひ候つるに毒含たりける心にて白河の關に
て被指出候ぬれゝ可爲樣も不候て憑を懸奉て這々參候つる也といへ
ゝ守糸不便也ける事哉此の世のゝの敵にゝ非ぬ人ゝこそゝ有なれ抑
其然る目見たるゝ然る事にて我支度なん違ぬるといへゝ何事にかは候
らんと云に守我年來宿願有て丈六の阿彌陀佛をなん始奉たりつるに
其陸奥守の一の者にて下ると聞しより押奉らむ金ゝ其をなん憑て有

つるに此て來にたれゝ今ゝ可爲方无〜といへゝ金何許可罷入にゝと問守懇くも問哉とゝ思ひ乍ら七八十兩許あん可入と聞と云ゝ然許の程ゝ國に不罷下とも搆へ試候なんといへゝ守驚て人の願ゝ自然ら叶ふ物也けりと云て忽に居所取せ食物馬の草なとゝ至まる殊ゝ饗應しけれゝ其時にそ澁々ゝ思たりつる從者共亦思ひ直りて鋼めき(デタ)被仕ける然て居所に返て皮子開て小瓶の口を觧て金百兩を取出して持行て守に取せたりけれゝ守喜ふなと云へと愚也や艶す顧けれゝ中々陸奥の國に有まゝーよりゝ吉て有けり而る間陸奥の國よりゝ前に任畢にけれゝ吉く德付て京に上にけり京にても金をし多く持たりけれゝ便々〜くて□□程ゝ内舍人に成にけり然て公ゝ仕をける程に代替りて不破の關の□□と云事に成て彼關に下る關固める居たりける程ゝ

彼陸奥の守の中上りと云事の北の方娘なと上せける加此關固めて居たる所に來懸たりけるを公にゝ可仕者にこそ有けれと云て通らんとしけるを通さんやゝ□□爲るをも不通さ返らんと爲をも不返して追迷ゝして關ゝ置て□けれゝ愁へ申しけをとも忽に沙汰も无りける程に夫共も皆棄つゝ迷にけり馬共も皆干殺して吉く耻を見せ責てけり然れは人の爲には强に不惡ましき者也亦佛神の加護や有けん不思懸金を見付て豐に成てそ有ける其を前々の福報に依にこそゝ有らめとなん語り傳へたると(ヤタ)

能登國堀鐵者行佐渡國堀金語第十五

今昔能登の國にゝ鐵と云なる物を取て國の司に弁する事をなんすなる其□□と云ける守の任に其鐵取る者六人有けるか長也ける者の

丹本鐵ノ鐵ト云トアリ

己等かとち物語しける次に佐渡の國にこそ金の花榮たる所い有しかと云けるを守自然ら傳へ聞て彼長と呼寄て物なと取せて問け流い長の云く佐渡の國ゝい金乃候ふゝやや金の候なめりと見て給へし所の候しを事の次てゝ己かとけ申ー候しを聞食たるにこそ候なれと守然らい其然見ゝけむ所行ゝ取て來なんやといへい長遣さは罷なんと云守何物か可入と問へい長人をい給いり候はし只小船一つ粮少とを給いりて罷渡て若かと試候いんといへい只彼か云ゝ隨て人ゝも不知せして船一と可食物少ーをを取せつ長其を得て佐渡の國に渡にけり其後廿日餘り一月許り有て守打忘れたる程に彼長急と出來て守の現いに居たる所ゝ見ゝたりけれい守心を得て人傳ゝい不聞して離たる所に自ら出會たりけれと長黒いみたる□□に裹たる物を守の袖の上に打置たれい守重氣に提て入にけり其後此長何ちとも无て俄に失にけり守人を分て東西に尋させけれとも遂に行方を不知止にけり何かゝ思て失たりと云事を不知彼金の有所尋ね問や爲ると思けるにやとそ疑ひける其金千両有けりとそ語り傳へたる然れと佐渡の國ゝ金は堀へしと能登國の人云ける也其長の後にも必す堀けんゝー遂に不聞えて止にけりとなむ語り傳へたると

鎭西貞重從者於淀買得玉語第十六

今昔鎭西の筑前の國□□の貞重と云勢德の者有けり字をは京太夫とそ云ける近來有る筥崎の太夫則重か祖父也其貞重か□□の輔の任畢て上けるに送りに京上すとて宇治殿に參らせむ新亦私に知たる人にも志さんと唐人の物を六七千疋許借りけり其質に貞重吉き大刀

十腰をそ置たりける京に上けるまゝに宇治殿に物共参らせ私に知たりける人々に志なとして返り下けるに淀にて船に乗ける間知たる人の儲したりけれはそれ食なとしける程に船より乗て商する者玉や買ふと云けるを聞入る者无りけるに貞重か舎人に仕ける男の船に乗たりけるか此へ來れ見むと云けれは漕寄て袴の腰より□□□（アコヤ字脱）の玉の大きなる大豆計り有を取出して取せたりけれは舎人男着たりける水干を脱て此には替てんやと玉の主所得しつと思ひけるにや水干を取手迷をして船を指放て去にけれは舎人男高く買つるにこそと思ひけれとも異水干を着替て悔しと思て玉をは袴の腰に裏て返る程に日員積りて彼方に行着けり貞重船より下るまてに（ニタ）物借たりし唐人の許に行て質は少くして物を多く借したりし喜ひなといもんやて（以下四十七字丹本無）行

たりけれは唐人も待よろこひて酒のませなとしてものかたりしけるこの玉もちのそのこ下衆唐人に會て玉や買と問に買むといへは袴の腰より玉を取出て取せたれは下衆唐人玉を受取て手の裏に入れて打振て見まゝに奇異と思たる氣色にて此は直何らと問へは欲氣に思たる氣色を舎人男見て十疋にといへは唐人迷て十疋に買むと云を舎人男直高き物にや有むと思て速に乞取けれは唐人我にも非て返し取せてけり舎人男今吉く尋て賣んと云て本の如く袴の腰に裏て去にけれは唐人貞重に向ひ居たる船頭に許に寄て其事とも无く私語けれは船頭打□□□□（ウナツキ字脱）て貞重に云御從者の中に玉持たる者有也其玉召て給はらんやと貞重人を呼て共の下衆の中に玉持たる者有（也ヵ）やそれ尋て召せと云けれは此告つる唐人走り出て其舎人男の袖を引へて此をそ教

へて引出たれは貞重實に玉や持たるとてとへは男澁々に候ふと云奉れといへと袴の腰より取出たるを貞重か郎等取り傳へて取せたれは船頭玉を受取て打振て見まゝに立走て内へ入ぬ貞重何ゝに入にか有んと思ふ程に彼質に置たりゝ太刀を掻抱て出來る十腰乍ら貞重に返し取せて玉の直高ゝ短也を云事も不云何にも云事无して止にけり貞重も□□□（アキレタルヤウニ字恰）てそ有ける水干一領は買たりける玉を十疋に賣んたに高しと思けるに若干の物に補（ツクナフ）して止にき現に奇異き事也かゝ此を思に（例）ふ其にも過たりける直にて有けるにこそ本より何にして出來けりと不知（ヤ）ぬ貞重か福報の至す所なめりとなん語り傳へたると

利仁將軍若時從京敦賀將行五位語第十七

今昔利仁の將軍と云人有けり若かりける時は□□と申ける其時の一の人の御許は恪勤になん候ける越前國に□□の有仁と云ける勢德の者の智にてなん有けれと常は彼國はそ住ける而る間其主の殿に正月に大饗被行けるに當初は大饗畢ぬ、れは取食（トリケ）と云者をは追て不入して大饗の下をゝ其殿の侍共なん食けるそれに其殿に年來に成て所得たる五位侍有けり其大饗の下侍共の食ける中に此五位其座にて薯蕷粥を飲て舌打をゝて哀れ何かゝて薯蕷粥に飽かんと云けれは利仁此を聞て大夫殿未た薯蕷粥に飽せ不給かを云へゝ五位未た不飽侍と答ふ利仁いて飲飽せ奉らはやといへゝ五位何に喜ふ侍んと云て止ぬ其後四五日許有て此五位ゝ殿の内に曹司住にて有けれゝ利仁來て五位に云く去來させ給へ大夫殿東山の邊に湯涌して候ふ所にと五位糸喜く侍る事哉今夜身の痒かりて否寢入不侍つるは但し乘物こそ侍らねとい

へゝ利仁此に馬は候ふといへゝ五位穴喜と云て薄綿の衣二ッ許に青鈍の指貫の裾壞たるに同色の狩衣の肩少し落たる着て下の袴も着に鼻高なる者の鼻崎ゝ赤みて穴の移り痛く（アタリ宇拾）濕（メシ）ゝみたるゝ洟を糸も巾ぬなめをと見ゐ狩衣の後ゝ帶よ被引喎たると引も不疏（ツヽロ）ゝ喎乍らあれゝ可咲（オカシケナシ）とも五位と前に立てゝ共に馬に乘て川原樣よ打出て行五位の共にゝ賤の小童たに无し利仁か共にも調度かは一人舍人男一人を有ける然て川原打過て粟田口に懸るに五位何こそとへゝ利仁只此也とて山科も過ぬ五位近き所とて山科も過ぬるゝといへゝ利仁只彼許也とて關山も過て三井寺に知たりける僧の許に行着ぬ五位然は此に湯湧たりけるかとて其をたに物狂はしく遠かりけると思ふに房主の僧不思懸と云て經營す然とも湯有り氣も无し五位何を湯ゝといへゝ

利仁實にゝ敦賀へ將奉る也と云ゝ五位糸物狂ゝしかりける人哉京にて此く宜ゝましかゝ下人なとも具すへからりける者を无下に人も无て然る遠道をゝ何かて行んと爲そ怖しき氣にといへゝ利仁疵咲て己れ一人かゝ侍るゝ千人と思せと云そ理なるや此て物など食つれゝ急き出ぬ利仁其にてそ胡錄取て負ける然て行程に三津濱（ノタ）よ狐一ッ走り出たを利仁此を見て吉使出來にたりと云て狐を押懸れゝ狐身を弃て逃といへとも只責に被責て否不逃遁を利仁馬の腹よ落下て狐の尻の足を取て引上つ乘たる馬糸賢しと不見とも極き一物よて有けれゝ幾も不延さ五位狐を捕へたる所よ馳着たれゝ利仁狐を提て云く汝ち狐今夜の内よ利仁かゝ敦賀の家に罷て云む樣ゝ俄に客人具し奉て下る也明日の巳時に高島の邊に男共迎へに馬二疋に鞍置て可詣來と若此を不云ゝ

汝狐只試よ狐ハ變化有者なれハ必す今日の内に行着ていへとて放てハ五位廣量の御使哉といへハ利仁今御覽せよ不罷てハ否有〜と云に合て狐實に見返々々前に走て行と見程に失ぬ然て其夜ハ道に留ぬ朝に疾く打出て行程に實に已時許に二三十町騎字拾許凝て來る者有り何ゝか有んと見るに利仁昨日の狐罷着て告侍にけり男共詣來無タにたりといへハ五位不定の事哉と云程に只近に近く成てはら〜と下るまゝに云く此見よ實御まーたりけりといへハ利仁頻咲て何事そと問へハ長〜き郎等進み來たるゝ馬ハ有やと問へは二疋候ふとて食物など調へて持來れハ其邊に下居て食つ其時に有つる長しき郎等の云く夜前希有の事こそ候しかと利仁何事そと問へハ郎等の云く夜前戌時許に御前の俄に胸を切て病せ給ひしかは何なる事ゝかと思ひ候ひし程に御自ら被仰樣己ハ狐也別の事にも不候此畫三津の濱にて殿れ餓に京よを下らせ給ける會奉たりつれハ逃候つれとも否不ニ逃得一て被捕奉たりつるに被仰る樣汝今日の内に我家に行着て云也樣は客人具し奉てなん俄ゝ下るを明日の已時に馬二疋に鞍置て男共高島の邊りゝ參り合へといへ若今日の内に行着て不云ハ辛ク目見せんすると被仰つる也男共速に出立て參れ遲く參てハ我勘當蒙なんとて怖ち騒せ給つれハ事にも候ぬ事也とて男共に召仰候つれハ立所に例樣に成せ給て其後鳥と共に參りつる也と利仁此を聞て頻咲て五位に見合をれハ五位奇異と思たり物なと食畢て急立て行程に暗々にそ家に行着たる此見よ實也けりとて家の内騒き嗚る五位馬より下て家の樣を見に脆ニハ〜しき事物に不似本着たり〜衣二ッか上に利仁か宿直物を着たれとも

身の内し透たりけれは極く寒氣なるに長櫃に火多く□□(オコシ字給)て疊厚く敷たるに菓子食物なと儲たる樣微妙也道の程寒く御ますらんをて練色の衣の綿厚を三ッ引重て打覆たれゝ樂と云ゝ愚也や食喰(モノクヒ)なとして靜りて後舅の有仁出來て云く此ゝ何に俄にゝ下せ給ひて御使の樣物狂ゝしき上俄病給ふ糸不他の事也といへは利仁打咲て試むと思給へて申たりつる事を實に詣來て告候ひけるにこそといへゝ舅も咲て希有乃事也とて抑も具し奉らせ給ひたなる人とゝ此御ます殿の御事りとゝへゝ利仁然ま候薯蕷粥に未不飽と被仰れゝ飽せ奉らんとて將奉たる也といへは舅安き物にも飽せ不給ける哉とて戯るれゝ五位東山に湯涌たりとて人を謀出て此く宜ふ也なといへゝ戯れて夜少〻深更ぬれゝ舅も返入ぬ五位も寢所と思しき所に入て寢むと爲る其に綿四五寸許有直垂有本の薄ゝ六借く亦何の有にや痒き所出來(モタ)にたれは皆脱棄て練色の衣三ッ上に此直垂を引着て臥たる心地未た不習に汗水にて臥たるに傍に人の入氣色有誰そと問へゝ女音にて御足參れと候へゝ參り候ひつると云氣ひ不憚ゝ搔寄て風の入所まは臥せたり而る間物高く云音ゝ何そと聞ゝ男の叫て云樣此邊の下人承ゝれ明旦の卯時に切口三寸長さ五尺の薯蕷各一筋つゝ持參れと云也けり奇異くも云哉と聞て寢入ぬ未た曉に聞ゝ庭に莚敷音に何態爲にか有むと聞まは夜曉て蔀上たるに見れゝ長莚をそ四五枚敷たる何の新にか有むと思ふ程に下衆男の木の樣なる物を一筋打置て去ぬ其後打次き持來て置を見れゝ實に口三四寸許の薯蕷の長さ五六尺許なるを持來て置已時まて置けれゝ居たる屋許に置積つ夜前叫ひしゝ早ふ其邊に有下人の限

りに物云ひ聞する人呼の岳とて有墓の上にして云也けり只其音の及ふ限の下人共の持來るたに然許多かり何況や去たる從者共の多さ可思遣奇異と見居たる程に五斛納釜共五ッ六ッ程搔持來て俄に杭共を打て居へ渡しつゝ何の新そと見程に白き布の襖と云物着て中帶して若やかに穢氣无き下衆女共の白く新なる桶に水と入て持來て此釜共に入る何その湯涌にそと見れと此水と見ゝ味煎也けり亦若き男共十餘人許出來て袪より手を出して薄き刀の長やかなるを以て此の薯蕷を削つゝ撫切に切る早ふ薯蕷粥を煮る也けり見に可食心地不爲返てゝ踈しく成ぬさら〳〵と煮返して薯蕷粥出來にたりと云へゝ參らせよとて大きなる土器一て銀の提の斗納許なるに三ッ四ッ許に汲入て持來たるゝ一盛たに否不食て飽ぬたりと云へゝ極く咲て集り居て客人の御德ゝ薯蕷粥食なと云ひ嘲り合り而る間向ひなる屋の檐に狐指臨て居たるを利仁見付て御覽せよ昨日の狐の見參するそとて彼れに物食せよと云へは食はするを打食て去にけり此て五位一月許有に萬つ樂き事无限然て上けるに假納の裝束數下調へて渡一けり亦綾絹綿なと皮子數に入て取せたりけり前の衣直垂なとは然也亦吉馬ゝ鞍置て牛綱なと加へて取せけれは皆得富て上ゝけり實に所に付て年來に成て被免たる者は此る事なん自然ら有けるとなん語り傳へたると

觀硯聖人在俗時値盜人語第十八

今昔見共摩行し觀硯聖人と云者有き其か若くして在俗也ける時祖の家に有けるに夜壺屋ゝ盜人入ぬと人告けれは人皆起火を燃して壺屋をは觀硯も入て見けれは盜人不見へ然れは盜人も无りけりと云て人

皆出なんと爲るに觀硯吉く見れは皮子共置たる迫に裾濃の袴着たる男打臥たり若し僻目にやと思て指燭を指て寄て見れは實に有り篩ふ事无限を何に怪しく思ゆらんを思に忽に道心發て此盗人の上に尻を打懸て吉く求めよ此方には无りけりと高やかに盗人に知せんと思て云に盗人彌々篩ふ而る間求くる者共も此方にも无りけりと云て皆出ぬ指燭も消ぬれは暗く成ぬ此時に觀硯密に盗人に起上て我か脇に交て出よ糸惜けれは逃さむと思ふぞと云けれは盗人和ら起上て觀硯か脇に付て出つ築垣の崩の方に將行て今日より此る事なせそ糸惜けれは逃すそと云て押出つ然れは逃て走り去ぬ誰と云事も何てかは知むと爲る其後觀硯年來を經て東國の受領に付て行ぬ而る要事有て京に上るに關山に邊にして盗人に合ぬ盗人多くして箭を射懸けれは觀硯か具しありける者共皆逃散ぬ觀硯は不被射と繁き藪に馬を押寄ける藪の中より盗人三四人計出て觀硯か馬の口を取つ或は鎧を抑へ或は轡を取て谷迫に只迫に迫持行く盗人ならは衣を剝馬を取らんこそ例の事なるに此く自らを迫持行は敵に殺んする也と思ふに觀硯肝心失て更に物不覺して我にも非ぬ心地して行に五六十町は山に入ぬらんと思ふ今は可殺に此く遥に將行は何と心も不得思ゆる見返て恐々見れは極き怖しき氣なる者共箭を差番つゝ後に立て來る而る間既に酉時計に成ぬ見れは山中の谷迫に菴造たる所有り糸稔はゝしき事无限吉馬二三疋計繫たり大なる釜共居並て谷の水を懸て湯涌に其に將行たれは年五十計なる男の怖し氣なるか水干裝束して打出の太刀帶たり郎等卅人計有此主人と思しき男觀硯を此へ將奉れと高く云に何にせ

んするにかと怖くして被節る我にも非て被引て行菴の前に引持行て抱下し奉れといへは若き男の強力氣なる來て觀硯を見共なと抱く樣に指濟て下つ被節て否不歩は此の主人の男來て手を取て菴の内より引入て裝束も解せつ十月許乃事なれは寒く御まにらんと云て綿厚き宿直物の衣持來て打着せたり其時に觀硯殺んするには非さりけり此は何ゝ爲事そと思廻すゝ更に不心得見れは菴の前に郎等共居並て俎五六許並て樣々の魚鳥を造り極く經營す此主人の男早く食物奉らせよと行へと郎等共手毎に取て目の上に捧はゝ持來を主人寄て取居ゆ黒柿の机の清氣なる二つを立たり盛立たる物共皆微妙くして其味艶ず吉く極しまたれは物吉く食つ食畢て後他の菴に桶共居て湯取せて後主人の男來て旅道にて久く湯浴させ不給つらん湯浴させ給へと云へは下て浴む浴畢て上れは新き帷持來て着ぬ其後本菴に將行たれは臥し又夜曉ぬれは粥奉らせ食物とも早くと急かして令食午未の時許ゝなる程ゝ物なと食畢て後ゝ主人の男の云く今二三日も可御坐れとも京に疾く御ささま欲からん然れは今日返らせ給ひね心も得させ不給は靜心も御をしと觀硯何にも宣もんにこそは隨もめと答ふ然て彼被追散たる從者共も去て行合て主を尋るゝ觀硯ゝ馬の尻に立たりける男の云く盜人七八人して我君をは鎧を抑へ弓に箭を番つゝ谷樣へ將奉ぬ敵の殺し奉つるにあそ有めれと云て泣けれは從者共京に返て家に行て我君は關山にて盜人に被取て御ましぬ今は死し給ぬらんと告けれは何しゝと思て待ける妻子共此く聞て泣喧る事无限此て觀硯をは本の馬に乘せて人五六人許付てそ返遣ける行ん道よりは不將行

して南山料になん將出たりける其より慈德寺の南の大門の前より行道よりなん粟田口へは將越て川原には出たりける家は五條邊に有けれは夜に入て人の居靜まる程にそ家に來て門を叩く程に馬に皮子二ッを負せて共に具したりけるを門脇に二ッ乍ら取下して此奉れと候つる也と云て取置て負せたりつる馬も具したりつる者共もやかて返去にけり此すれとも更に心不得而る間家より人出て誰そ此く御門叩くはと問へは我來たる也此開よといへは殿御ましにたりとて一家嘘り合て門を開て入たれと妻子觀硯を見て喜ふ事无限門の脇に置たりつる皮子を二乍ら取入て開て見れは一ッには文の綾十疋美八丈十疋疊綿百兩入たり今一には白き六丈の細布十段紺の布十段入たり底に立文有り披て見れは糸惡き手を以て假名に此を書たり一とせの壺屋の事を思し出よ其事の子今難忘けれは其畏を可申方の不候つる此上らせ給ふ由を承て迎に奉る也其喜さは何れの世にの忘れ申さむ其夜徒に成なましかは今まて此て待らましやはと思給ふれは无限なんと書たり其時にそ觀硯被心得て肝落居ける東よりも極く不合にて上たりけれは待受けん妻子の爲にも耻かしく忌けるに此物共を得たれは喜くて田舍の物を具したる上たる樣に思させて有ける此る事こそ有しかと觀硯か語りし也不思懸物共得たる觀硯也かし然れは世の人尙人の爲には吉く當り可量事也となん語り傳へたると

東下者宿人家値產語第十九

今昔東の方へ行者有けり何れの國とは不知入鄕を通けるに日暮にけれと今夜許は此鄕に宿せんと思て小家の□に大きやかに造て稔は

丶し氣也けるに打寄て馬より下て云く其々へ罷る人の日の暮にたれは今夜許宿丶給てんやと家主立たる老丶らひたる女出來て疾く入て宿り給へといへは喜ひ乍ら入て客人居と思しき方に居ぬ馬をも廐に引入させて從者共も皆可然所に居つれは喜と思ふ事无限り然る程に夜に成ぬれは旅籠□て物なと食て寄臥たるに夜打深更程に俄に奥の方に騒く氣色聞ゆ何事ならんと思ふ程に有つる女主出來て云く已か娘の侍るか懐妊既に此月に當て侍つるか忽にやはと思て晝も宿し奉つるに只今俄に其氣色の侍れは夜には成にたり若只今にても產れなは何かし給はんすると宿人の云く其れも何か苦く侍らん已は更に然樣に事不忌侍まゝと女然ては糸吉と云て入ぬ其後暫く有程に一切騒き喧て產つるなめりと思ふ程に此宿人の居たる所の傍に戸の有より長八尺許の者の何とも无く怖し氣ある内より外へ出て行とて極て怖し氣なる音丶て年は八歳は自害と云て去ぬ何ある者の此る事は云つるなんと思へとも暗けれは何とも否不見人に此事を語る事无して曉に疾出ぬ然て國に下て八年有て九年と云に返り上けるに此宿たを丶家を思出て情有丶所そかゝと思へは其喜も云はねと思て寄て前の如く宿ぬ有し女も前よりも老て出來たり喜く音信給へりと云て物語なとする次てに宿人抑も前に參し夜產し給丶人は今は長し給む男か女か疾く念き罷出し程に其事も不申きといへは女打泣て其事に侍り糸清氣なる男子にて侍しか去年の其月の其日高き木に登て鎌を以て木の枝を切侍ける程に木より落て其鎌の頭に立て死侍にき糸哀れに□□る事也と云ける時にそ宿人其夜の戸より出し者の云し事は然は

其を鬼神なとの云けるにこそ有けれと思ひ合て其時に然々の事の有しを何事とも否不心得侍て家の内の人只云事なめりと思て然も不申て罷にしを然は其事を者の示し侍けるにこそと云へは女弼よ泣悲けり然て宿人京に上て語り傳へたる也けり然れは人の命は皆前世の業より依て産るゝ時より定置つる事にて有けるを人の愚にして不知して今始たる事の樣に思歎く也けり然れは皆前世の報と可知也となん語り傳へたると

東小女與狗咋合互死語第二十

今昔□□國の□□郡に住ける人有けり其家に年十二三歳許有女の童を仕ひけり亦其隣に住ける人の許に白き狗を飼けるか何なる事にか有けん此女の童たに見ゆれは此狗咋懸りて敵にしけり然れは亦女の童も此狗たに見ゆれと打んとのみしけれは此を見人も極しく怪ひ思ける程に女の童身に病を受てけり世の中心地にて有けるにや日來を經るまゝに病重りけれは主此女の童を外に出をんと爲に女の童の云く已と人離たる所に被出なと必す此狗の爲に被咋殺なんとする病无くして人の見時そら己たに見ゆれゝ只咋懸る何況や人も无き所に己重病を受て臥たらは必す被咋殺なん然れゝ此狗の知ましからん所に出し給へと云けれは主現に然る事也と思て遠き所に食物なと皆拈て密に出しつ毎日に一二度は必す人を遣て見せんと云誘へて出しつ而るに其亦の日ゝ此狗有り然れは此狗知らぬなめりと心安く思て有に次の日此狗失ぬ此を怪ひ思て此女童出したる所を見せに人を遣たりけれは人行て見に狗女の童の所に行て女の童に咋付にけ

り然れは女の童狗と互に齒を咋違なむ死て有ける使返て此由を云け
れは女の童の主も狗の主も共に女の所ゝ行て此を見て驚き怪ひ哀か
りけり此を思ふに此世のみの敵ゝは非けるにかとそ人皆怪ひけると
なん語り傳へたると

修行者行人家殺女至死語第廿一

今昔□□國□□郡に住者有けり家に數の狗を飼置て山ゝ入て鹿猪を
咋殺をせて取事を業とし〜けり世の人此を狗山と云也けを而るに常の
事なれゝ數の狗を引具〜て山ゝ入ぬ食物なをを持て久く山に有時
も有けれゝ二三日不返けるに家ゝ若き妻獨り居たり其間二人の修行
の僧來て貴く經を讀て食物を乞ふ僧乃形ち糸清氣也けれは无下の乞
食には非ぬなめりと思て女主經を貴むて上に呼上て物を供養する

に僧の云く已は乞食にゝ不侍佛の道を修行して所々に流浪するか粮
の絶たれは來て此く申す也と女主此を聞て彌よ貴ふに僧の云く已は
亦陰陽の方も吉く知り靈驗新たなる祭なとも爲るといへゝ女其祭し
ては何なる事の有そと云は僧精進不愚して其祭をしつれゝ身に病无
く自然ら財出來り神の祟无く夫妻の間吉く〜て萬つ思ふ樣に吉也と
いへゝ女然て其祭には何の人そと問へは僧更に別の物不入幣の新
に紙少〜白米少し時の菓子油なとそ入といへは女然ては糸安き事な
ゝそ然は其祭〜給てんやと云ゝ僧糸安き事也と云て留ぬ忽に女に沐
浴潔齋せさせて精進を始む僧祭の具を調へて三日と云に僧の云此
祭ゝ深く淨き山にして只獨り行て祭也とて三日と云ゝ祭の具を具
〜て僧女と只二人深き山に入て幡を立並へ御洗米時の菓子なと極く

事々しく調へ居て祭文を讀て祭畢つ女夫の无き間は微妙き祈をもしつる哉と思て急き返るを僧女の若くて清氣なるを見に忽に愛欲の心發て萬の事忘れぬ然れは女の手を捕へて云く我未た不習事也と云へとも君を見に既に三寶の思食さん所を知ぬ本意を遂んと思ふを女辭て遁れんとすれは僧刀を拔て君此を不用突殺てんと云へは女人も无き中なれは爲へき方も无て有を僧藪の中に引入て既に懷抱せんを爲れは女難辭得ぬして僧の本意は隨ふ而る間本の夫狗共を具して山より家に歸るに可然事にや有けん其時しも其を過けるに藪の中に者のそよ〳〵と鳴て動けるを見て夫立留て此藪の中に鹿有也けりと思て大きなる口鴈箭を番て弓を強く引て動く所に指宛て射たりけれは人の音にてあと許云ふ音有り驚き怪むて寄て草を搔去て見れは法師の女の上に重りたる最中を射たる也けり奇異と思て寄て法師を引去は法師は吉く被射ぬけれは死けり下なる女を見れは我妻也奇異けれは若僻目かと思て引起したるに現に其なれは先此は何なりつる事そと問は妻事の有樣を委く語る傍を見れは實に御幣御供なと糸事々しくて有り其時に法師をは谷に引き棄て妻を搔具して家に皈ぬ奇異かりけん法師を三寶の惱しを思食けるにこそは有らす亦前世の宿業の招く所を知へし但し此を思ふは世の人上も下も心幼く吉无からん者の云ん事に付て女の獨り行ことは可止事也となん語り傳へたると

名僧立寄人家被殺語第廿二

今昔京に生名僧して人の請を取て行世を渡る僧有けり而るに此僧可

然所の請を得たりけれい喜て行むと爲るに車を否借不得けれは歩行にて行むとするに法服をして行かは遠くて歩行の見苦かりけれは懸衣にて平笠なと打着て法服をは袋に入て持せて其請したる所の近からん小家を借て法服をして寄むを思て行けけり然て其所の向也ける小家を然々と云て借けれい若き女主有て疾く入らせ給へと云けれは入にけを客人居と思しき所の一間許有けるに莚を敷て取せたりけれは其居て法服をせんとて冒被て居けるに早う此の家には若き女主の法師の間男を持たりけるを實の夫の雑色也ける男は此を伺はんとて外へ行ぬる樣にて隣の家に隠れ居て伺けるを不知して立入たをけるに僧の入ぬれは此を其そと思て左右无く家へ行けるに僧の見れは大路の方より若き男の糸悪氣にて入來るまゝに妻に向て汝此や虚言也ける彼女と云へと妻彼れは向殿の請の有て裝束奉らんとて立入せ給へる人そと云も敢す男刀を拔て走寄て僧を捕へて最中を突つ僧不思懸して手を捧て此も何にといへ共可取合力も无て被突つ仰樣に臥ぬ妻も穴奇異と云て取懸れとも更に益无し男突まゝに踊出て逃るを僧乃童子の小童の有ける漸く大路に出て人殺て行と叫けれは人捕へてけり僧は被突て後暫く生たりけれとも遂に死けり家より人來る突たる男をは撿非違使に取せてけり妻を捕へて撿非違使にとらせてけり男被問て遂に獄に被禁けり實に由无き事に依て三人なん徒に成にけり此を前生の宿報の至す所そと有らめ但し世の人上も下も不知らむ小家なとには由无く白地にも立入ましき也此く不思懸事の有也努々可止となん語り傳へたると

鎭西人打雙六擬殺敵被打殺下女等語第廿三

今昔鎭西□□の國に住ける人合賀也ける者と雙六を打けり其人極て心猛くして弓箭を以て身の莊として過ける兵也合賀は只有者也けり雙六は本より論戰ひを以て宗とする事とする此等籌論をしける間に遂に戰に成けり此武者なる者合賀が髻を取て打臥て前に差たる一とひを拔むとするに懈に鞘に付たる緒を結付たりける刀にて片手を其結を解んとしける程に敵其刀の欄にひしと取付たりけれは武者立て力有者也けれとも否不拔得してひちくりける程なる遣戸に包丁刀の被指たりけるを見付て髻を取乍其れへ引持行けるを髻被取たる者遣戸の許へたに行なは我は被突殺なんとを今は限也けりと思て念して不行と辭けるに其家も此髻とられたる者の家にて下に下女共數し

酒造る粉と云物を舂喧けるに此髻被取たる家主辭ふといへとも否不辭得して只被引に引れて行けるに音の有限り叫て我を助けよと云けれは其時に家に男ゝ一人も无りけれは此粉舂の女共此の音を聞て棒云物を提て有限り走り上て見けれは主の髻を被取て殺さんと爲を見て女共穴悲や早う殿を殺奉る也けりと云て棒を以て其髻取たる敵を集て打けれは先頭を強く被打て仰樣に倒けるをやがて壓て打けれは被打殺にけり其時に家主は起上て引放れにけり然て定めて沙汰有けむ然れとも其後の事ゝ不知敵に可値者にも无りけれとも云甲斐无く女ともに被打殺にけれは聞人奇異き事也とを云ひ繚けるとなん語を傳へたると

山城國人射兄不當其箭存命語第廿四

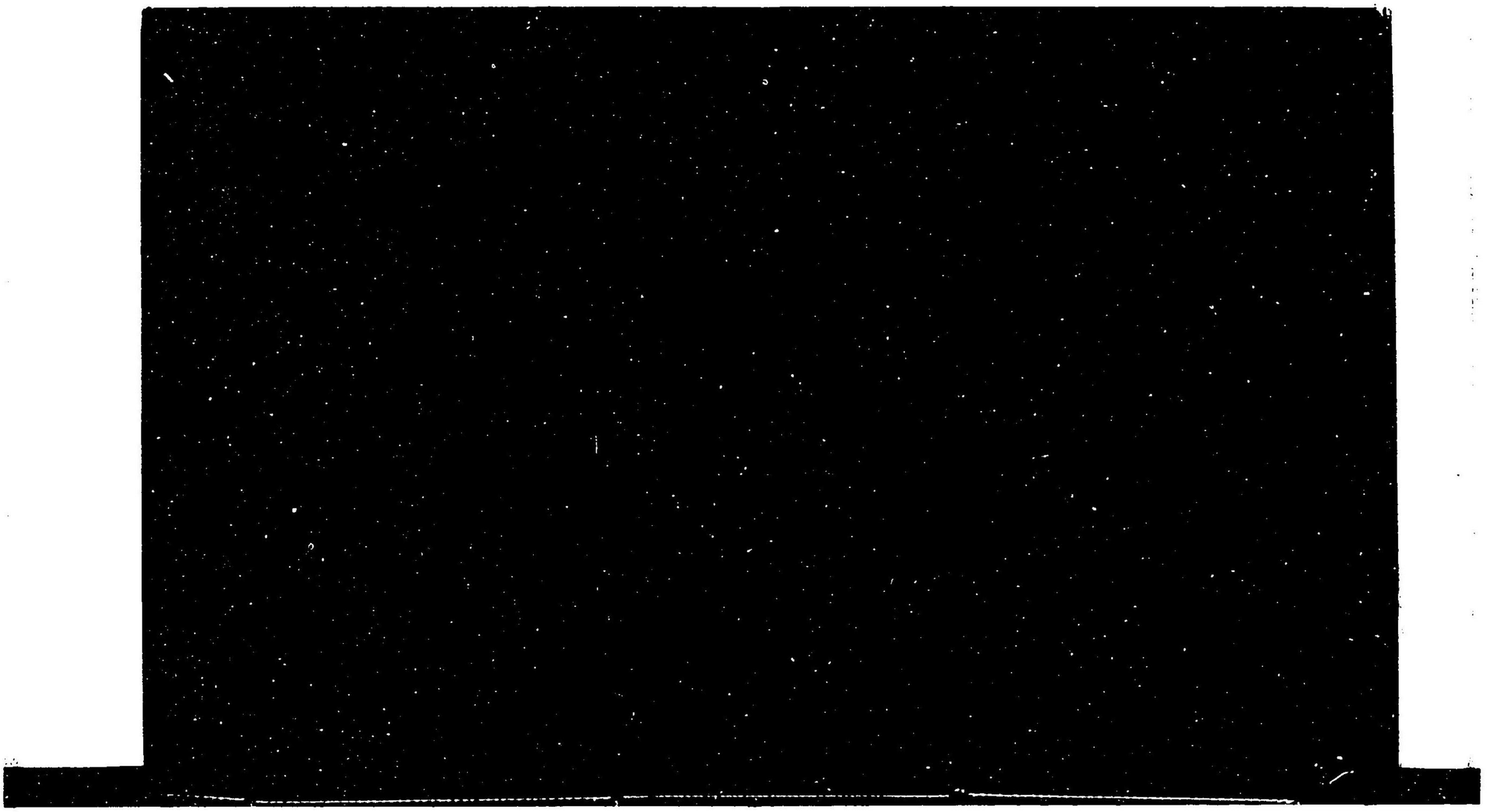
今昔山城國□□の郡□□の郷に住人兄弟有けり何なる事か有けん弟心の内に兄を何かして殺さんと思けるを只打思たる樣に持成てなむ過ける兄何にも此事を不知けり而る間弟隙を量り短を伺ける程十二月の廿日余の比夕暮に兄近き隣りなる人の家に行て夜に入まて物食ひ酒呑て物語りなどして居たりけるを弟よき隙也と思て目差すとも不知暗きに弟弓箭許を持て其兄か有ける家の門の迫に立て兄り出むを只一箭に射殺さんと思ひ立りけるに夜も漸く深更ぬ今や物語り畢て出るかと(無)〳〵と待けるに兄此事を夢にも不知して物語り畢て賤の小男の有に火を燈せて出れは弟喜て大なる矢を弓に番て強く引て一段許にて差宛て射むには弓箭の道に愚ならん者そら何にか放む況や此は極たる手聞にて有けれは慥に最中を射つ尻答ふらんと思ふに箭のちうと鳴て外樣に反ぬれは此と何にと思て二の箭を搔んと爲る程に兄い戸を開て出るに不思懸弓の音の近く爲に合て箭の來て我最中に立と思ふにちうと鳴て外へ反ぬれは迷て急と返り入て戸を閉つ奇異く物も不思て見れは早う我か前に差たる刀間塞に貝を摺たりけるに箭の喬見たりけるに摺樣に當て返ぬる也けり家の内の者も此を見て騒けり里の者共も聞繼て手毎に弓箭を取て火を燈して喧り求めけれとも弟は射けるまゝに踊て逃にけれは何しに有む此も弟の爲態とも知さりけるに其夜射たりける箭の里の者共の求して出〳〵たりけるか正しく其弟の日來持たりける箭にて有けれは隱れ无りけり然れは定めて沙汰有けん然れとも其後其事を不知兄か語りけるを聞たる人語けるをや弟骨肉とても心は許ましき也けりとそ聞人云ひ繚けるとな

ん語り傳へたると

明治十五年八月四日出版御届　定價金三拾錢

出版人　東京府平民　近藤圭造　深川區富岡門前町七十番地

發兌出版所　東京深川公園內　近藤活版所

東京發兌　丸屋善七　吉川半七

取次人　芝區濱松町壹丁目十五番地　志賀二郎